

令和 3 年度

研究紀要



秋田県立由利高等学校

以前の勤務校での話。職員室で、近々海外に行くことになった保健体育の先生に、英語科の先生が「〇〇先生は英語話せるんですか。」と聞いていた。その先生は「全然。でもこれがあるから大丈夫。」と言いながら、自動翻訳機を取り出した。そして彼が何か日本語を話してボタンを押すと、あっという間に完璧で流ちょうな英語がその翻訳機から流れてきた。彼は仕事柄、海外に行くことが多いらしいがたいていの場合その翻訳機でなんとかなるらしい。機械自体の価格も数万円台と聞いたから、脇でその話をきいていた私は更に驚いた。

テクノロジーの進化は日進月歩であり、自動翻訳機も例外ではなく、以前のようなとんちんかんな答えが返ってくることもかなりなくなっているらしい。そうなれば、我々英語教員の地位だってかなり怪しくなってくる。学校で英語を教える必要なんかなくなるのではないかと危惧した。一頃国が盛んに唱えていた「英語の話せる日本人」とか、「グローバル人材の育成」などと言った言葉も、自動翻訳機があれば事足りるように思えた。だって、英語に限らず翻訳機はおよそ我々が海外で必要とする言語を話せるのだから。音声認識の精度も日々向上している。わざわざタイプする必要もそのうちなくなるだろう。

自分が英語教員なので英語を話題にしてしまって申し訳ないが、私たちはそういう時代に生きているということである。英語という教科を一つ例に挙げても、学ぶ必要性というものを生徒が感じる機会があるのか甚だ疑問だ。

英語教員になった原点は、英米のポップカルチャーへの憧憬である。中学生になりたての昭和50年代前半の情報量は、今と隔絶的に違う。学校の教科書はもちろん、雑誌やラジオを手当たり次第漁って英語という言葉を紹介して英米文化を学んだ。音楽を聴いたり映画を見たりして英米文化に対する憧れはますます高まっていたが、中学1年生の頃の自分にとっての基本は学校での英語の授業である。40年以上前のことだから今と違って話すことに焦点はそれほどというか、全く置かれていなかったが、授業を通して教科書の内容を学ぶことの楽しさやそれと関連した先生の話に熱心に耳を傾けていた。当時自分が英語の教員になるなどとはつゆにも思わなかったが、やはり英語の授業が一番得意で大好きだった。その理由は一言で言うと、授業を通して学ぶ英米文化が楽しかったからだ。昭和の後半は、おそらく全国どこでもそういった類いの授業が行われていたと思う。

時は流れ時代は令和である。自動翻訳機が多言語を簡単に話してくれる時代に、英語の教員はタブレット端末を使いながらコミュニケーション能力の向上も図らなければならない。だが、グローバル人材になりたくない生徒にだって、英語を楽しむチャンスはあって当然だ。授業開始のチャイムが鳴ったときに、私が40年以上前に感じていたあのワクワク感ををもちながら生徒は授業に臨んでいてくれるか気になっている。

目 次

巻頭言

校 長 水谷 佳延

1 令和3年度 授業改善の取組

授業改善の取り組みと流れ
指導主事訪問

教務部

2 研修報告

A講座「教職5年目研修講座」

鳥井 拓弥

A講座「初任者研修講座」

土井さくら

B講座「育成する資質・能力から考える美術の授業」

山岡美佐子

令和3年度 カリキュラム・マネジメント開発研修

相場康太郎

3 研究・実践記録

AKITAグローバルネットワーク事業

国際科運営委員会

高橋 裕子

1 令和3年度 授業改善の取り組み

- 授業改善の取り組みと流れ
- 指導主事訪問

令和3年度 授業改善の取組

教務部 野澤 幸子

1 今年度の授業改善共通テーマ

「主体性を育み、思考を深める授業の工夫 ～ねらい・振り返り・ICT～」

2 テーマ設定の理由

本校の生徒にとって、「主体性」は身につけなければならない学びの姿勢であり、課題である。本校の職員にとっては育成しなければならない生徒の学びの姿勢であり、課題である。そこで、今年度も、何ができるようになるのかねらいを明確にし、振り返りで何ができるようになったか（何ができなかったのか）を実感させ、次は何ができるようになるのかと、学びにさらなる意欲・関心を持たせたいと考えた。今年度は、主体性を育み思考を深める手立てとして、さらにICTを追加した。教育長や校長より提示された、あるべき学習指導（新学習指導要領に対応した授業づくり、ICT機器の活用など）等からも、その活用は不可欠であった。実際、教育現場のICT化はコロナ禍に関わらず近年喫緊の課題の一つであり全学年全クラスに配置された電子黒板やタブレット端末が、生徒の豊かな学びはもちろん教員の新たな指導の可能性を促す助けになり、授業改善が進むことを期待した。また、ICTの活用に不安を感じている教員が少なくない中、教員が試行錯誤しながら授業を工夫する姿が生徒の学ぶ姿勢に影響するという協働的作用も考えられる。以上の理由から、今年度のテーマを設定した。

3 授業改善の取組の流れ（別紙）

4 成果と課題

ねらいと振り返りの手立てに着目した授業改善の取組は、ここ数年間の継続的取り組みでもあり、学びの支援として定着してきていることが授業アンケートからもわかった。今後は、ねらいのわかりやすさや意欲、たとえば1時間後、単元終了後、1年後に何ができるようになっていくかといった見通しを持たせるなど、生徒の主体性を一層引き出すねらいの追求が必要である。また、ねらいに比べ、振り返りの評価は総じて下がる傾向にあった。時間の確保（必ずしも授業時間内に限らない）や方法についてどのような工夫ができるか、今後の課題としたい。

他方で電子黒板やタブレット端末が各教室に配置された初年度、もう一つの手立てである「ICT」は学びに活用できたといえるのか…。授業アンケートで、1回目からもっともポイントをあげたのが「授業中、ICTを活用して知識の定着を図ったり、考えを深めたりする等、生徒の主体性を育もうとする場面がある」への回答だったことから、ICT機器の活用が1年間かけてしだいに進み、生徒の授業理解を促しているということがわかった。指導主事学校訪問の際の指導主事の指摘や研究授業の協議会、授業参観シートの授業参観者のコメントからも、本校ではこの1年間でICT機器の積極的活用が進んできた。教員も生徒も、ICT機器の活用による学びの可能性に触れることができた1年であった。これは、教育情報部による機器活用のための校内研修はもちろん、各種行事やHR活動での活用が進んだことも大きいと考える。他方で、ICT機器の活用能力は教員間でどうしても格差は大きく、このままでは支障が出てくることも考えられる。来年度からは新学習指導要領に基づく新しい評価規準で生徒の多面的な力を評価することになる。生徒の力をひきだし学びを深めるICT機器の活用方法や能力を高める校内研修の在り方などを検討していきたい。

令和3年度 授業改善の取組の流れ

教務部（研修）

	授業改善	研修	教育実習	研究紀要
4月	校長より今年度の『学習指導』等の提示 【P】 (1) 新学習指導要領に応じた授業づくり ・主体的・対話的で深い学び (2) ICT機器の活用 ・「目的」ではなく学びを支援する「手段」 ・なぜ必要か？ (3) 評価 ・主体的・対話的で深い学びをどのようにして評価していくか	高教研加入調査 教育センター講座申込	今年度実習生（1名）の担当 教員、HRなどの調整➡職員会議で報告	
5月	令和3年度授業改善共通テーマ ➡職員会議で提示【P】 指導主事学校訪問（1回目） 授業参観	<u>センター研修</u> 【A講座】 ・A-3（初任者研修） 4/28, 5/12, 6/9, 8/5, 8/6, 9/1, 9/29, 10/27, 1/6(オンライン実施), その他 ・A-12(教職5年目) 6/11, 9/3 ・A-26(新任校長) 5/17, 6/10, 6/11 ・A-33(新任学年主任) 5/14, 6/24 【B講座】 ・B-4(育成する資質・能力から考える美術の授業) 9/24 <u>校内研修</u> 「救命講習会」（8月予定） 「ICT活用推進リーダーと研修参加者の協働による校内研修会」（予定） 「ICT活用研修」 「リモート授業講習会」 <u>その他校外研修</u> ICT活用推進リーダー対象研修会 ICT活用推進モデル校公開授業研究会…e - AKITA ICT学び推進プランより	教育実習	
6月	ICT活用研修会（電子黒板、タブレット） ◎定期考査①分析、今後の授業改善について 【C】			
7月	授業アンケート①実施			
8月	◎授業アンケート①結果分析、報告 【C】 救急救命講習会 →中止 リモート授業講習会		来年度実習の内諾書	
9月			教職インターンシップ（県立大）→中止	
10月	◎定期考査の結果分析、今後の授業改善について 【C P】 授業参観期間（10/4～10/29） 指導主事学校訪問（2回目）…授業参観、研究授業、授業研修会等			内容検討
11月				
12月	授業アンケート②実施			原稿依頼
1月	◎授業アンケート②結果分析 【C P】			原稿〆切
2月	分掌評価会議、今年度の授業改善について総括			編集 校正
3月	◎次年度に向けた授業改善案、授業目標（テーマ）の設定 【P】			上旬完成 ➡周知（案内）

令和3年度教育委員会指導主事等の学校訪問 実施要項

秋田県立由利高等学校

1 訪問日

令和3年10月25日（月）

2 訪問者

高校教育課	主任指導主事	小林正英（英語）
高校教育課	指導主事	伊藤 匡（理科）
高校教育課	指導主事	櫻田瑞子（国語）
五城目高等学校	教育専門監	八柳英子（地歴公民）

3 重点指導事項

（１）組織で取り組む授業づくりの充実

- ・ねらいに基づいた授業構成
- ・生徒の思考を深める授業展開
- ・評価と検証に基づいた授業改善

（２）「こころ 姿 振る舞い さわやか高校生運動」の推進による生徒指導の充実

- ・さわやかな整容
- ・さわやかな生活態度
- ・さわやかな学習環境

4 本校の学校訪問1か月前課題

主体性を育み、思考を深めるための授業実践

- ① 「何ができるようになるか」を明確にした目標の提示
- ② ICT機器を活用し主体性を高める工夫
- ③ 振り返りのタイミングと方法の工夫

5 日程

3校時 10:35～11:20 校長面談・・・場所：校長室

4校時 11:30～12:15 表簿閲覧・・・場所：国際交流室
(立ち会い 教頭、相場、佐々木勝、齊藤広)

昼休み 12:15～12:55

5校時 12:55～13:40 授業参観（別紙授業一覧による）

(研究授業対象クラス以外の生徒は5校時終了後放課)

6校時 14:00～14:45 研究授業

教科	授業者	科目	対象クラス	場所
国語	渡辺 吉幸	古典B	2 B	語学演習室
地歴公民	渡邊 慎一	地理B	3 D	国際交流室
理科	鳥井 拓弥	理数物理	2 D (選択者)	物理・地学実験室
英語	大須賀 弥生	コミュニケーション英語 I	1 E	1 E 教室

放課後 15:00～16:00 授業別分科会
国語・・・場所：3 B 教室
地歴公民・・・場所：3 C 教室
理科・・・場所：3 D 教室
英語・・・場所：3 E 教室

16:10～16:40 全体会・・・場所：会議室

6 分科会・全体会について

【分科会】進行：各教科主任

- ・授業者から本時の授業のねらい、1 か月前課題との関連、感想等
- ・参観者から質問、意見等
- ・質疑応答、意見交換
- ・指導主事等から指導助言

【全体会】進行：教頭

- ・校長挨拶、指導主事等の紹介
- ・分科会報告
- ・指導主事より
- ・校長挨拶

令和3年度指導主事等の学校訪問における1か月前課題

（1か月前課題）

主体性を育み、思考を深めるための授業実践

- ① 「何ができるようになるか」を明確にした目標の提示
- ② ICT機器を活用し主体性を高める工夫
- ③ 振り返りのタイミングと方法の工夫

（本校の現状と課題）

本校の生徒の実態として、「主体性に欠ける」「受け身の姿勢で、学習が作業になっている」などの点が以前から指摘されてきた。そこで、授業を通じて特に育成したい学びの姿勢を「主体性」と考え、それを育成する手立てとして、一昨年度は「明確な授業目標の提示」に、昨年度はさらに「達成感をもたせ次の授業につながる振り返り」に力を入れて授業改善に取り組んだ。授業アンケート等の結果から、一定の成果を得ることができたと考えるが、まだ十分とは言えない。

先日の第1回指導主事訪問の際の授業参観においても、「生徒がおとなしい。活動する場面が設定されておらず、受け身で聞く授業が多い。もう少し生徒たちが活動できる場면을意図的に設定して欲しい。」という指摘があった。

また、今年度から電子黒板やタブレット端末等のICT機器が導入され、それをどのように活用するかは喫緊の課題である。もちろんただ使えばいいというわけではなく、来年度から実施される新学習指導要領で求められる力を育むための有効なツールとして効果的に活用することが求められる。まだ導入されたばかりで活用状況にも個人差がある状況であるが、校内外の研修や、活用事例の共有等を通して職員全体の活用スキルを向上させていくことが必要である。

（1か月前課題設定のねらい）

- ① ICT機器を効果的に活用することで生徒の興味・関心を高めるとともに、主体的に活動する場面を設定し、思考を深める授業展開を工夫する。
- ② 教員個々のICT機器活用についての意識を高め、学校全体におけるICT活用スキルの向上を図る。

国語科学習指導案（古典B）

日 時 10月25日（月）6校時
対象クラス 2年B組 31名
場 所 語学演習室
指 導 者 渡辺 吉幸
使用教科書 古典B 古文編（数研出版）

1 単元名

古典を読み味わい、作品の価値や敬語の用法について考察する

2 単元の目標

- ・古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解し、内容への関心を深めようとする。
(関心・意欲・態度)
- ・古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえる。(読む能力)
- ・古典の内容や表現の特色をとらえ、作品の価値や敬語の用法について理解する。(知識・理解)

3 単元の評価規準

- ・関心・意欲・態度
語句の意味や用法、文の構造を理解し、単元の内容について関心を深めようとしている。
- ・読む能力
構成や展開に即して内容を的確にとらえようとしている。
- ・知識・理解
表現の特色をとらえ、敬語の使い方について理解している。

4 単元と生徒

(1) 単元観

本単元の教材は古文の代表作とも言える『源氏物語』の冒頭部分である。そこには、古文の読解や鑑賞に重要な点が多く含まれる。平安中期の貴族社会のあり方、人物関係、思想風俗等を理解する上で本教材は非常に意味のあるものであると言える。特に、尊敬語・謙譲語といった敬語を学ぶ上で有為な教材である。

(2) 生徒観

生徒は男女問わず仲がよく、学級全体が温かい雰囲気である。受け身的な授業態度が感じられるが、相談検討の際には近隣同士での話し合いがスムーズである。タブレット等 ICT 機器についても抵抗感なく使用できる。

(3) 指導観

普段目上の対象との会話機会が少ない高校生にとって、敬語が身近な存在ではなく、特に謙譲語は場面や機会が少ないと思われる。こうした背景のもとで古文の謙譲語を理解させるのは困難であろう。本時では、現代語における謙譲語の構造を示した上で既習事項を確認し小テストを行いながら定着を図りたい。

5 単元の指導と評価の計画（全 16 時間）

時	学習内容	評 価 規 準		
		A 関心・意欲・態度	B 読む力	C 知識・理解
1	源氏物語について	現代語訳や視覚作品を通して作品世界に関心を持つことができる	・当時の社会常識をもとに作品の解説が理解できる	・作品世界が理解できる
2 ～ 5	本文解釈(～交じらひ給ふ まで)		・現代語訳ができる ・人物関係が理解できる	・敬語が理解できる

6 ～ 7	本文解釈(～心細げなり まで)		・現代語訳ができる	
8 ～ 10	本文解釈(～限りなし まで)	当時の社会常識に関心 を持つことができる	・現代語訳ができる	・敬語が理解できる ・敬意の方向が理解で きる
11 ～ 14	本文解釈)～桐壺なり まで)		・現代語訳ができる ・当時の社会常識に即 して内容が理解できる	・敬語が理解できる
15 ～ 16	敬語のまとめ (本時 2 / 2)			・敬語が理解できる ・敬意の方向が理解で きる

6 本時の計画

(1) ねらい

謙譲語の構造を理解し、現代語・古語ともに動作の受け手側への敬意である点を理解できる。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	本時の目標を確認する 謙譲語がわかる！使える！ 前時まで学習した謙譲語を確認する	本単元で学習した謙譲語が列挙で きようノート等で準備させる	
展開 35分	現代語における謙譲語の構造を理解する 古文における会話内の謙譲語、単元内の 謙譲語の構造を理解する 理解度を測る小テストを行う 小テスト結果から誤答の多いものにつ いて再度解説する	電子黒板の Google スライドを用い て構造を提示する 指名して平常語を謙譲語にできる か試問する 電子黒板の Google スライドを用い て構造を提示する タブレットの操作に手間取ってい ないか・小テストが開始できている かを確認する 電子黒板に小テスト結果をリアル タイム表示し、復習させる	【知識・理解】 場面に応じた 謙譲語が使える か・現代語 訳ができるか (10 問小テス ト:google フ ォーム)
整理 5分	本時のまとめ・確認を行う	小テスト結果をもとに指名で口頭 試問する	

令和3年度教育委員会指導主事等の学校訪問 分科会記録

(教科：国語)

【授業者より】

- ・ 本時の目標を提示するのを忘れてしまった。
- ・ 先週他クラスで実施、校長に生徒の活動を入れたらどうかとの助言をいただき、生徒の活動を入れてみた。
- ・ 源氏物語を通して敬語を学ぶということで尊敬語や謙譲語、敬意の方向などを学んできた。
- ・ ICT活用も目標の一つ。生徒のスキルをアップさせるという点では効果があったのかなと思う。
- ・ 研究授業自体も久しぶりで、指導案の作成も昔とはずいぶん変わっていて戸惑ったところもある。

【参観者からの感想】

(安保)

- ・ 難しい部分の授業だった。敬語の中でも謙譲語が一番難しい。わかりやすく説明しようとすればするほど、生徒は混乱しやすい範囲。電子黒板を使って、スライド（イラスト、映像や矢印）が出るのは分かりやすい。しかし、黒板の良さ＝見たい時に見られるところが…。理解が追いつかない生徒にとって、スライドは戻れない。スライドが少ない方がよいのではないかと思った。良い部分とそうではない部分のギャップを今後考えていかなければならないと感じた。
- ・ 謙譲語…古典なのか現代文なのかが分かりづらかった。源氏物語色がほとんどなかった。一番残念だったのは、目が悪くて見えなかったことと生徒の発言が聞こえなかったこと。

(理知)

- ・ よかったこと→電子黒板のイラストの提示。関係性が分かりやすかった。小テストの分析が即時に提示できるところ。
- ・ 気になったところ→生徒の発言を書かせたりするとよかったかも。誤答を共有することがあってもよかった。
- ・ 字の大きさ。フォント、縦書き横書きなど迷うところだ。

(富樫)

- ・ 源氏物語、敬語を研究授業で扱おうとするその勇気が素晴らしい。スライドや小テストはさすがだった。
- ・ 敬語を学ぶ際、現代語でやるか本文(古語)でやるか、どちらかに絞ってもよかったのではないかと。小テストの記述問題の解答…完全一致が原則だが、解答範囲はどのくらいまでバリエーションを持たせたのかあとで教えてほしい。

(鷺谷)

- ・ICT活用について教えていただいている。小テストの実施は今までやっていたが、自分の立ち位置（分布など）を客観視できるようになったことは素晴らしいと思った。振り返りもフォームで行ってもよいのではないだろうか。
- ・最初の本文を扱うところで、ノートを見ている生徒と教科書を見ている生徒がいて、どうしていいか戸惑っていた。使うツールが増えれば増えるほど、指示は分かりやすく明確にする必要があると感じた。
- ・「使える」と「分かる」「理解できる」、何を目標にするかによって授業が変わる。その点があいまいだった。
- ・現代語における謙譲語のへりくだる感じが、古文では伝わらず生徒にとっては分かりづらかったと思う。

(村上)

- ・スライドもテストもタブレットで実施。挿絵などもあり、敬語を理解する上ではわかりやすかったのではないかな。文字が小さくて見えづらかったのが残念。ポイントになる部分だけでも大きな字にできればよかったのかもしれない。教科書などを見るときも生徒は分かっていたいなかった。
- ・一コマ通して筆記用具を使わない授業だった。個人的には書かないと覚えられないし定着しない印象がある。前時までにやっていたらすいません。定着させるためにやっていたことがあれば教えてほしい。最後のまとめも、生徒がまとめる時間としてあれば生徒も振り返ることができたのではないかな。

(佐々木)

- ・アットホームな感じだと思いつつ、反面注意が必要だと感じた。指示の出し方が生徒に行き届いていない、何していいかわからない場面があった。
- ・生徒を指名した後の間があれば、生徒が考える時間ができたと思う。逆に
- ・生徒のペアワークの時間やICTの活用は、何を目的にするのか。やることを目的ではない。生徒に目的が伝わっていなかったために、間延びした感じがする。

(越川)

- ・ICT活用はさすがだと思った。ただ見えづらかったことが残念。
- ・生徒にもっと大きな声で発言させてもよかったのでは。
- ・振り返りのタイミング…最後のまとめることはできていた。
- ・やるが多かったような気がする。

(渡辺)

- ・記述式解答の揺れについて
「受ける」「うける」「される」漢字とひらがな表記を準備

「お願いします」「お願いする」「おねがいします」

- ・スライドが縦書き表記に向いていないのが難点。E x c e l も同様。

(安保)

- ・ねらいをどうやって提示するつもりだった？
- ・ホワイトボードかスライドか？スライドだとしたらやはり消えるのか？

(渡邊)

- ・スライドではずっと提示し続けることはできない。

(佐々木)

- ・書いて覚えるしかないと思うので、I C Tには懐疑的だ。

(安保)

- ・見て覚えるしかない授業になっていくのだろうかと感じている。小テストは何分くらいかかるのか？

(渡辺)

- ・10分くらいかと。

【指導助言】(高校教育課指導主事 櫻田瑞子先生)

- ・源氏物語の敬語を、I C Tを使って授業という挑戦が素晴らしい。
- ・I C T活用がメインではない。言葉にこだわって授業をする中で、小テストが一問一答形式でよかったのか。「さぶらふ」などは様々な意味がある。
- ・授業改善の視点で考えたとき、古典の苦手意識は生徒にとって大きな課題。「学習意欲が高まらない」ことが課題。生徒の興味関心を高める工夫が必要。イラストやI C Tを使って興味関心を高めるのは分かるが、古典の苦手意識を払拭できるような取組をお願いしたい。
- ・目標に対して、生徒が「今日謙譲語が分かった」と実感できたかどうかは疑問。本時の計画を綿密に立てていただきたい。
- ・学習指導案のやり取りをしている際もお話ししたが、単元を通して生徒にどのような力を身に付けたいのかということがぶれてしまっている。「読む力」ということだったが、この単元の最後が知識理解を確認する活動になっている。せっかく古典作品を使って読むことをやってきたのに、生徒にとっては単元最後のまとめが知識理解だと「敬語をやった」という感じになってしまうのではないか。やるとすれば単元の最初に知識理解「敬語」をやってから「読むこと」に入った方がよかったのではないか。
- ・新指導要領でもそうだが、知識技能、思考判断、主体的に学習活動に取り組む姿勢のつながりが大事。それをもとに単元を組み立てていくことが望ましい。
- ・欲張らないことが大事。現代語をやるのか、古典をやるのか、活用するのか、人物関係を説明するのか、焦点化が必要。
- ・日ごろから授業改善について意見交換してほしい。

地理歴史科学学習指導案（地理B）

日 時 10月25日（月）6校時
 対象クラス 3年D組 31名
 場 所 国際交流室
 指 導 者 渡邊慎一
 使用教科書 新詳地理B（帝国書院）

1 単元名

第2部 1章 第3節 日本の自然の特徴と人々の生活
 空中写真の利用

2 単元の目標

- ・意欲的に考察しようとする。（関心・意欲・態度）
- ・図や資料、空中写真から、日本の地形や気候の特徴と災害について考え、災害発生の理由と対策を言葉で表現することができる。（思考・判断・表現）
- ・図や資料、空中写真から情報を読み取り、思考や判断の根拠とすることができる。（資料活用の技能）
- ・日本の地形や気候の特徴と災害に関わる基本知識を身に付ける。（知識・理解）

3 単元と生徒

（1）単元観

本単元では日本の地形や気候について学習するとともに、関連した災害について、災害発生の理由を明らかにし、防災について考える機会ともなる単元である。

（2）生徒観

理数科31名のクラスである。進学希望者が多いが、共通テストで地理を必要とする生徒は多くない。理系科目や総合的な探求の授業では、様々な資料を活用したスライド作成や発表等の学びを通じ、表現力を高めている。

（3）指導観

上記の単元観・生徒観に基づき、ここでは日本の地形や気候の特徴と災害との関連性を学習する。地図や写真等の図版を読み取る活動を通して資料活用の技能を高めるとともに、地震や気象災害について考察する活動によって思考力・判断力・表現力を高めたい。

4 単元の指導と評価の計画（全4時間）

時	学習内容	評 価 規 準			
		A 関心・意欲・態度	B 思考・判断・表現	C 資料活用の技能	D 知識・理解
1	日本の地形について、プレートや構造線を中心に学ぶ。			資料を適切に取り、地形の特徴について考察している。	日本の地形の特徴について理解する。
2	日本の気候と、気象災害について学ぶ。			資料を適切に取り、気候の特徴について考察している。	日本の気候の特徴について理解する。
3	開発に伴う災害と防災について学ぶ。	開発災害について関心をもち、意欲的に学んでいる。	災害と防災について思考し、適切な言葉で表現している。		
4	空中写真について学ぶ。 （本時）		写真から得られる情報を思考し、適切な言葉で表現している。	資料を適切に取り、得られる情報について考察している。	空中写真の見方について理解する。

5 本時の計画

(1) めらい

- ・空中写真による土地利用の調査を、開発災害を題材として考察する。
- ・新課程における新科目「地理総合」をイメージし、防災の観点からも指導する。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	・教科書 p 79 の内容を確認する。	・今年 7 月の由利本荘市の浸水や、8 月の西日本の大雨被害についても関連させる。	
展開 37分	① 熱海土石流について、NHKと日本経済新聞のインターネット記事について考察する。 ② ①に留意しながら教科書 p 80 「人間生活と自然環境」を確認する。 ※ 空中写真を利用し、開発の状況を読み取ろう。 ③ ①から災害時の盛土付近の状況を確認し、なぜ盛土をする必要があったか考察する。 ④ 教科書 p 19 から空中写真が災害調査に有効であることを確認し、国土地理院のホームページから熱海土石流の被害について考察する。 ⑤ ④から由利高校周辺の空中写真を確認し、考えられる災害について考察する。 ⑥ ④から自分が暮らす地域について、どんな開発がされているか調査する。	・開発に伴う災害と報道されているが、原因についてはまだ裁判中であることに留意する。 ・各自の考えをワークシートに記入するよう指示する。 ・平成 24 年の空中写真を比較させ、土石流の上流で、なぜ盛土を行ったか考えさせる。 ・現在の地形図と昭和 22 年の空中写真から芋川の流路の変化を気付かせる。	（思考・判断・表現）教科書や資料に基づき、適切にワークシート作成を行うことができる。 （資料活用の技能）国土地理院のホームページから適切に調査することができる。
整理 3分	・自分が暮らす地域でどんな開発がされたか考えることの重要性について説明し、本時の授業で学んだことや考えたことなどについてワークシートに記入する。		（知識・理解）授業での思考を自分の言葉で表現できる。

(教科：地歴・公民科)

1 授業者から（渡邊慎一）

国土地理院のデータ（空中写真閲覧サービス）を前の勤務校の土木科の先生から聞き、使いたいと思っていたので今回授業で試用するいい機会と考えた。自分自身プライベートでも使っており、生徒にも、授業や受験に関わらず使ってほしいと思っている。東日本震災の経験からも、いろいろな意味で使えるツールだと思うが、今日の授業で生徒がこのツールを使って主体的に取り組めたかどうかは？個々に使わせるとなるとうまくいかないと考えて急きょペアワークに変更した。最初はどうしても説明が長くなり、熱くなってしまった。NHKや日経のデータは説明したいことをおさえて写真を見せて調べさせて考えさせる時間を増やすようにした。最初は『熱海の盛土はなぜ必要だったのか』をテーマに進めたかったが、盛土については現在公判中ということで変更した。空中写真を使って生徒の主体的な学びを導きたかった。

2 参観者の感想など

齊藤（広）：《地理担当》防災はこれからの地理（地理総合）で重要視される。そこで、防災教育の地歴・公民科職員の（が指導すべき）ゴールはどこにあるのか？防災をどう防ぐか？なのか。命をどう守るか？ということについて意見を聞きたい。授業改善テーマのICTについては、空中写真の新旧データを画面上でスライドしながら比較できるなど生徒の意欲を喚起し動かすことができていた。実際は、そこからどう考えさせるかの学びが肝心だが、現状を読み取らせるところから、未来、この先の地区はこうなっていくだろうな、そうすればどういう対策が必要だろうという部分まで持っていけたらよかった。説明をおさえながら、写真やスライドで考えさせることを重視して進めていく展開はコンパクトで良かった。が、かけ崩れと地滑り、土石流の違い等の地理の基本的知識については（防災の観点からも）説明が必要だったと思う。また、生徒のタブレット操作の様子から、生徒のICTにはかなり差があり、それを教壇からどう把握しどう指導するのかが、今日の授業云々ではなく、ICTを活用する我々の課題の一つだと実感した。ペアワークが自然にできていて参考にしたいと思った。

齊藤（孝）：《公民担当》以前、5年ほど地理を担当したことがあるが、当時は地形図等OHPを使用しており、今はタブレットが配付され、地理こそこのような電子媒体が活かせる科目だと思う。ICTに関してもグループ学習にしても生徒は随分慣れており、先生の日頃の指導の成果かと思う。ICTについて自分が日頃感じているのは、タブレットが導入されたことで、ますます機器に慣れる一方で手で書くことがおろそかになっている面もあり、例えば進路情報などICTでしか情報を得ようとしないうし得られないと思っている。蛍雪時代などの進路情報誌は見ようとしないうし面倒くさがる。実際はどちらも大事でこうした課題について先生方の意見を聞けたらと思う。

司会（煙山）：《日本史担当》生徒が紙媒体、本などで調べられなくなっているということについても後ほど意見が聞けたら。

山岡：《美術》身近なテーマで、災害時や家を建てる時など思い出したりして将来にも役立つそんな授業。タブレットなどICTの活用が進むと生徒は自分で進めていけるため、主体的取り組みが可能になる反面、コミュニケーション、生徒一人ひとりの声が聞こえてこなくなりがちだが、その点はペアワークにしたことで主体性とコミュニケーションが両立していて自分も参考にしたいと思った。

ペアワークだと、自分の住んでいる地域を知られたくないという生徒もいるかもしれないし、個人情報配慮という観点からも市役所など、誰もが知っていて興味を持ちそうな場所を指定するのもどうか？みんなの考えが可視化される工夫（グーグルのフォームを使うなど）もあればよかった。

司会；実践している ICT に関する建設的な提案などもあれば。

佐藤：《体育》地理に久しぶりに触れた。ICT 機器もあり興味関心が高められた。生徒も意欲的に考えることができていたのではないかな。次の展開への移行や移行の根拠がはっきりしていてスムーズでわかりやすい授業であった。何と言っても楽しかった。自分は体育なので、やはり楽しんでやってもらうことが大事だと思っていて、保健の授業でも入りの映像や電子黒板など様々な手法があるということに改めて考えることができた。また、ふりかえりをタブレットでやった場合、ワークシートをどういうふうに授業改善につなげていくのか。授業改善につなぐににくいのでは？活かし方を皆さんに聞きたい。体育でもタブレットでふりかえりをやっているがもう少し改善点があればと思う。

司会；振り返りについてもあとで。

相場：《数学》高校では地理を選択していなかったが、初めて高校の地理の授業を見て面白かった。ICT で思考を深めるという 1 か月前課題に即したいいい授業だった。時事問題から身の回りの問題まで考えられて幅広く、数学ではなかなかこうはいかない。数学も新課程では身近な問題として考えられるようにはなっているが数学で時事問題を考えるのはない。電子黒板で動画はやはり分かりやすい。が、今日は教室が広がったので後方の生徒は見づらかったのでは。自分のタブレットの画面を生徒のタブレットに見せられたらと思うのだが。（生徒が）考えさせられる授業展開で、自分なりの意見を持って終われたのでは。振り返りのワークシートは何で作っているのか？提出はどのように？

渡邊；ドキュメント（Google）で作成し、提出フォルダへ。

相場：自分は毎回フォーム（Google）でふりかえりを実施している。わからないことなども書かせている。生徒は結構いろいろ書いている。来年度の新しい評価にも活かせるのでは？

渡邊；評価は单元ごとに行っている。

野澤；《世界史》1 か月前課題や新学習指導要領も踏まえた意欲的な授業だった。「空中写真を利用し、開発の状況を読み取ろう」という目標は、空中写真を見れば何がわかるのか、できるのか。空中写真の見方がわかれば何がわかるのか、できるのか、開発の状況がわかるのか...というわかりやすく、また、どんな空中写真をこれから見るのだろうと期待を持たせる目標。インターネット記事や国土地理院のHPなどいろいろな情報ソースの提示は良い。生まれた時から携帯が当たり前にある世代にしては情報源が限られているように思うので。また、7月の熱海の土砂崩れは規模も大きく死者も多く出て生徒の記憶にも新しいと思われるが、それでも自分ごとと捉えることは高校生にとっては難しい。由利高校周辺の空中写真を見てさらに自分の住んでいる地域の写真を見ることで、社会一般の問題を自分にひきつけて考えられるし、身の回りのことを考えることが社会や世界の問題を考えることだという気付きにもなったと思う。資料はこうして使えるんだということが伝わっていたねらい通りの授業。

煙山；時事問題、特に太陽光パネルに注目して主体的に考えさせていたことが良かった。自分の授業では、日本の歴史ですら自分ごとに考えられない生徒がいる中で、江戸時代の本荘藩や亀田藩の興味深い地図を使っても生徒の食いつきはいまひとつで主体的な学びにつながっていない。日頃の自分の授業を考えるうえで大変参考になった。

3 質疑応答、意見交換

司会；振り返りについて意見が多かったので掘り下げたい。評価と授業改善に資するふりかえりとは。相場；授業でわかったこと、わからなかったことを書かせる。質問を書いてくる生徒も（休み時間）。

振り返りは授業の中ではなかなかできない（生徒は休み時間などで行う）。質問は次の時間に紹介してみんなで共有。

司会；評価につなげるとすればどう使う？使える？振り返りは都度都度か？

相場；毎回でも単元ごとでもどちらでも良いのでは。ただ、授業時間内にやるようにしないと入力しない生徒もいることはいる。評価にどうつなげていけばいいのかが課題。いずれふりかえりをするのとはしないのでは全然違う。紙でもいい。

司会；ICTでの教材提供など情報源をきちんと示してあげるとスムーズな授業展開ができる。今回の授業で使ったICT教材はいつから使用？

渡邊；国土地理院のサービスの使い方については事前に指導。

斉藤（孝）；2年の地形図学習で盛土は出てくるのでは。

4 教育専門監（五城目高校 八柳英子）から指導助言

渡邊先生とは同期採用で指導案を見て今日の授業を楽しみにしてきた。今日の授業の良かった点と改善すればよかった点について分けてお話ししたい。

- ・良かった点 1) 自分の地域の災害について考えさせるのはよい。熱海の災害は大災害ではあっても他人事だったのが地域の災害を学ぶことで自分事になる。 2) 資料が豊富（空中写真・地形図）で生徒もそれをよく活用できていた。 3) 生徒のペアワークが上手。右側の生徒が…左側の生徒が…といった役割分担が良くできていて普段の指導のたまもの
- ・改善点 1) プリントの質問事項に対して、先生が答えをしゃべってしまっている箇所がいくつかあった。結構メインとなる部分だった。もともと川の流路だったことを生徒にペアワークで導かせたかった。前半で15分から20分しゃべっていたところがあった。もっと早くすんでいけば、後半で生徒がもっと主体的に取り組めたかも。 2) 学習課題の作り方。最初の指導案では「盛土の原因を読み取らせる」もの。それを意味とらせたいこだわりはどこに？そこ（盛土の原因）から空中写真にもっていきかけた（渡邊）。そうであれば指導案は、学習課題1（「盛土の原因は何だろう」）、学習課題2（「自分の地域を調べてみよう」）とすれば（時間的にも）流れ的にもよい。学習課題をつくる時のポイントは、なぜそれを考えさせるのか（考えさせる必要があるのか）。文系でも理系でも地理では特にそれが大事。予想される答えは何か、そのためにどの資料を使うのか、どの資料を見せるのかを考えながら授業を組み立てていけばいいのではないかな。 3) 見せる資料で、現在の地形図と過去の写真を比較した理由は？地形図と写真の比較ではなく。新旧地形図比較、写真比較の方が分かりやすかったのでは？ハザードマップを見せない意図は？あとで見せる予定（渡邊）。ハザードマップを使って、その根拠を確認するために地形図や空中写真を使うのもありか。地理だけでなく他の教科でもなぜそれを考えさせるのか、そのために何を使うのか考えることは重要。いずれ、生徒が意欲的でとてもいい授業でした。

理数科学習指導案（理数物理）

日 時 10月25日（月）6校時
 対象クラス 2年D組 21名
 場 所 物理・地学実験室
 指 導 者 鳥井 拓弥
 使用教科書 改訂版物理（数研出版）

1 単元名

第5章 円運動と万有引力 3 単振動

2 単元の目標

- ばね振り子や単振り子などの現象に関心をもたせ、意欲的に探究させる。（関心・意欲・態度）
- 単振動をしている物体の変位や速度、加速度を数式で表し、表現する力を養う。（思考・判断・表現）
- 単振り子の実験を通して、実験の基本操作を身に付けさせ、過程や結果を適切に記録する力を養う。（観察・実験の技能）
- 単振動をする物体の様子を表す方法や、単振動をする物体に働く力について、基本的な概念や原理・法則を理解させる。（知識・理解）

3 単元と生徒

（1）単元観

「単振動」とは、一直線上を規則的に振動する運動のことを指す。物体の位置や速度が一定の周期とともに変化するため、生徒にとっては視覚的にイメージを掴みやすい現象である。その一方で、単振動する物体の変位や速度などを、数式を用いて定量的に表そうとすると、三角関数を用いたり複数の式を用いたりする必要があり、比較的難易度の高い単元であるとも言える。

（2）生徒観

理数物理選択者は男子18名、女子3名からなる。理系教科を得意とする生徒が多く、様々な自然現象に対して高い関心をもっている。また、年度当初からタブレット端末を授業で利用しており、ICT機器を用いた学習に慣れてきたようである。数式や実際の数値を扱い、各題材を定量的に扱おうとする際には困難を感じる生徒が多いため、ヒントを用意し、様々なバリエーションの学習活動を設定するなど、「できる」と生徒が感じるための様々な足場かけを準備することを心掛けたい。

（3）指導観

単振動は抽象的に扱うと内容が煩雑になるため、ばね振り子や単振り子などの具体的な事例を提示して扱い、本単元の学習を進める。授業においてはICT機器を利用して、教室で行う実験以外にも様々な映像教材を提示して、生徒の理解を深めさせたい。また、各種Googleサービスを利用し、生徒とのコミュニケーションの機会の拡張や実験データの記録・集約の効率化を図りたい。

4 単元の指導と評価の計画（全7時間）

時	学習内容	評価規準			
		A 関心・意欲・態度	B 思考・判断・表現	C 観察・実験の技能	D 知識・理解
1 ～ 2	単振動の変位・速度・加速度を表す式		単振動をする物体の変位や速度、加速度について考察し、数式で表現している。		単振動の基本的な性質について理解し、知識を身に付けている。
3	単振動に必要な力				復元力について理解し、知識を身に付けている。
4 ～ 5	単振り子（本時5／7）			単振り子の実験を行い、基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を適切に記録・整理している。	単振り子の等時性について理解し、知識を身に付けている。
6 ～ 7	ばね振り子	単振動の規則性について関心をもち、意欲的に探究しようとする。	ばね振り子の速度や周期について考察し、導き出した考えを表現している。		

5 本時の計画

(1) ねらい

- ・ 単振り子の実験を通して、基本操作を習得するとともに、過程や結果を適切に記録して考察し、重力加速度の大きさを求めることができるようになる。(観察・実験の技能)

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10 分	1 簡易的な実験装置を利用して重力加速度 g を求め、公表されている g の値と比較する。 2 前時の内容を復習し、単振り子の周期 T を表す式「$T = 2\pi \sqrt{\frac{l}{g}}$」を確認する。また、周期 T の式を変形し、重力加速度 g を周期 T で表す。 3 本時の学習目標を確認し、ワークシートに記入する。 単振り子の実験を通して、重力加速度の大きさを求めることができる。	・ 発問を通して、この実験方法では誤差が比較的大きくなってしまいうことに気付かせる。 ・ 電子黒板に資料を投影し、周期 T を表す式で用いる物理量について視覚的な理解を促す。	
展開 30 分	4 事前に Classroom に寄せられた質問に対しての解説を聞き、疑問点を解決する。 5 単振り子の周期について、4 人 1 グループとなって測定し、重力加速度の大きさ g を求める。なお、結果は Classroom 上にアップロードされたスプレッドシートに入力する。 6 各グループの実験結果を比較しながら、考察を行う。考察した結果についても、同様にスプレッドシートに入力する。 各班の実験データの中にも誤差の大小があるが、その違いは何かからくるのだろうか？ 7 各グループの実験結果および考察をクラス全体で共有し、まとめる。	・ 授業前に質問事項を確認した上で、板書等を用いて説明する。 ・ タブレットやスプレッドシートの操作に困っている生徒には、使用方法について助言する。 ・ 考察を行う際の着眼点として、次の 2 点を示す。 ① 各班が得た重力加速度 g の値は、演示実験で測定した値に比べて誤差はどの程度か？ ② 誤差が比較的大きいのはどのような条件の単振り子か？	(観察・実験の技能) 実験の基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を適切に記録・整理している。 (ワークシート)
整理 5 分	8 本時を通してわかったことや疑問に感じたことについて振り返り、ワークシートに記入する。	・ まとめの記入が進まない生徒には、本時のワークシートや実験内容のポイントについて助言する。	

令和3年度教育委員会指導主事等の学校訪問 分科会記録

(教科：理科・物理)

司会：1ヶ月前課題、ねらい等の確認

【授業者（鳥井・物理）】

力学分野の単振動についての授業。実験の操作手順の確認や安全指導、結果の記録や考察、重力加速度の計算として導き出す。授業の導入で演示実験や前回の振り返りを行った。

【良かった点】

- ・classroomにこれまで学習したプリントが蓄積されていて見返しする事が出来る。
- ・黒板まで出てこなくてもタブレットで結果を共有できた。毎回、振り返りすることで定着する。
- ・プリントの作り方の工夫［インプット・アウトプット］資料 。
- ・時間、メジャー、ストップウォッチ器材の使い方に慣れてないため誤差があったが、それでも数値が導き出せた。

【改善点】

- ・導入に時間をかけすぎて、まとめの時間が十分にとれなかった。

【参観者】

（高橋・物理）予備実験の苦勞がいい数値に反映されていた。生徒達はタブレットには慣れていたが、実験の技能に慣れてない。実験では生活の中に無い手順が多いのが、現代の課題。授業前に入力された質問に答えるのは斬新だ。

（工藤・化学）ICT機器の活用がスムーズに行われ、ねらいを明確にした授業がうまくいっていた。実験が出来ない期間はYouTubeを見せたりした。

（太田・生物）指導案の展開に時間をとるなら前の時間に実験の説明を少しふれておけば（電卓、はかり方、計算）うまく時間内に収まったかと思う。

（渡邊舞・実習助手）ICTは使いこなしても、実験の技能がなかなか追いつかない。生徒のスキルを予測して予備実験や準備をしていた。日々の授業からの信頼関係が成立していて、実験や計算も試行錯誤しながらグループでまとめている。

（土井・保体）実験をベースにした授業の形が新鮮だった。生徒になったつもりで体験し、理解できた。全員がタブレットを使ってデータを共有できた。

（佐藤茂・数学）実験があつて考察までできていた。実験の安全性の指導もできていた。実験の誤差。 π を3.141としたが3.142である。

（斎藤淳・保体）体育では落ち着きの無い生徒も授業に最後まで集中していて指導力を感じた。ICTを使いこなしていた反面、出来ないこと（技能面）を感じ

じた。

(大井・数学) 過去のプリントをいつでも見る事が出来る。質問の受付が双方向的でよい。スプレッドシートを使うのであれば関数を入れて活用したらどうかと思う。実体験と公式。

(猪股・音楽)：質問に対しての解説はもう少し軽くていい。理数科として数値に対して追求する姿を見たかった。

(月本・保体) 高校生から教師になっての姿、声のはり（実験の危険な所を大声で）が良かった。他にスマホで測る、カウントするなどの活用も面白いかなと考えた。

【質疑応答・意見交換】

(猪股) 主体性について、振り子が回っていることについて

(高橋) 誤差や精度を求める事に力を入れたい。どう実験すればいいか考えられるところまでやればいい。

(工藤) 始めの時間で 1 年次の実験・ビー玉の考察をしているのに、最後に今回のまとめの考察が出来ないのが残念。

(司会：工藤) 体育の授業での振り返りはどうしているか。

(斎藤) 最後 5 分の振り返りを紙では無くタブレットに入力して時間節約。ダンスは動画で振り返りをしたい。生徒の中には紙に書きたい生徒がいる。成績処理との兼ねあい。(前期) 後期はこれからどうするか思案中。

(司会：工藤) 数学科はどのようにしているか。

(大井) 数式をタブレットでというのは使いづらい。ソフトを使いこなしている先生もいるが、研修室の授業では Wi-Fi が無いので使えない。

高橋清：作れる授業

【指導主事：伊藤】鳥井先生は立派になったなと感じました。分科会の先生方からも前向きな意見が多数出された。研究授業としても挑戦した内容だった。目標がしっかり練られた内容を示していた。生徒が情報を共有して Goal に向かっていた。(ユニバーサルデザイン) 見通しをもって、示していた。安全対策、コロナなど指示も明確。主体的な活動を導き出していた。教科を問わず主体性は必要。

課題としては、説明が多かった (20 分)。説明しすぎない視点、もしかしたらしすぎて意欲が下がるかも。もっと楽しく出来るかも、笑顔も教材、準備万端で楽しくなる。教科の楽しさにつなげる授業を目指して欲しい。ファイルの共有までいけていた。～ (動画の紹介・3・5 分程度) ～

「葉っぱにいった水は」辻先生 (兵庫県)

～教えすぎない・授業改善のヒント～目標に向かっている授業

英語科「コミュニケーション英語Ⅰ」学習指導案

実施日時 令和3年10月25日（月）
場 所 1年E組教室
対 象 1年E組
授 業 者 大須賀 弥生
教 科 書 My Way English CommunicationⅠ（三省堂）

1 単元名 Lesson 6 *Washoku* —Traditional Japanese Dishes—

2 単元の目標

- (1) 無形文化遺産に登録された和食の特徴を通して、食文化を守る取り組みについて考えを深めることができる。
- (2) 身近な和食について説明することができる。
- (3) 関係代名詞の意味と用法を理解し、適切に使うことができる。

3 生徒と単元

(1) 生徒観

男子11名、女子24名のクラスである。入学時から基本的な学習習慣は身についており、授業への取り組みは意欲的である。特にペアワークでは活発に意見を交わすことができる。英語に苦手意識をもっている生徒が多いが、教え合いながら表現しようとする態度が身についてきた。

(2) 単元観

本単元では、ユネスコの無形文化遺産に登録された和食の特徴や意義について考える。身近な和食が世界的に尊重されている文化であること、世界の食文化に触れ、各国の食文化を保護するためにどうすべきかを考える。和食を自国の文化として紹介する表現活動を通して、日本の食文化の良さや国際的な視点を感ずることができるような単元にしたい。

CAN-DO リスト

1年話すこと（やりとり）

身近な話題や本文の既習の内容について、質問されたことに答えることができる。

1年話すこと（発表）

読んだ内容についての整理や簡単な感想を述べるができる。

4 単元計画（総時数10時間）

時間		学習活動
1時間目	Section 1	世界の食文化にはどのようなものがあるかを読みとる
2時間目		本文の音読、関係代名詞（主格）を使った英作文
3時間目		和食の特徴はどのようなものかを読みとる
4時間目	Section 2	本文の音読、関係代名詞（目的格）を使った英作文
5時間目（本時）		和食のメニューを説明したり、質問したりする
6時間目		日本で食べているものはどこから来たものかを読みとる
7時間目	Section 3	本文の音読、関係代名詞 what を使った英作文
8時間目		食文化を守るためにどのようなことが行われているかを読みとる
9時間目		本文の音読、疑問詞+to～を目的語にとる英作文
10時間目	全体	要約を完成、語句、文法事項の定着

5 評価規準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
自分が食べている和食に興味を持ち、紹介できるよう取り組んでいる。	関係代名詞を使って人物や物を説明することができる。	和食の特徴や貴重な文化として保存するために何が必要かを理解する。	関係代名詞, SVO+how to の意味と用法を理解している。

6 本時の計画

(1) ねらい

- ・和食のメニューを紹介することができる。
- ・紹介されたメニューについて、質問や感想を述べることができる。

(2) 学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10 分	Warm-up ・ Debate Topic について、ペアで自分の考えを伝え合う。 ・ 前時 (Section 2) の内容確認 ・ 音読	・ 原稿を見ないで、相手に伝わるように話すよう促す。 ・ 写真やキーワードを使って、英語で内容を思い出させる。	
展開 30 分	海外の人にお勧めの和食メニューを紹介する ・ 和食メニューを決め、それを説明する英文を作る。 ・ ペアで互いの和食メニューを紹介し、質問をする。 ・ 全体で各メニューの代表生徒が発表する。	・ 目標を提示し、活動の順序を説明する。 ・ 英文と画像を入力するフレームを提示し、例を示す。(Jamboard) ・ 例を示し、質問の仕方を練習させる。 ・ ペアワークの様子を見ながら、発表者を選ぶ。 ・ 質問やコメントをするように促す。	A 紹介できるように取り組んでいる
まとめ 5 分	・ 本時を振り返り、Review sheet に記入する。		

令和3年度教育委員会指導主事等の学校訪問 分科会記録

(教科：英語)

□授業者の感想（大須賀弥生先生）

コミュニケーション英語Ⅰの流れは、内容把握、音読、文法事項確認、演習問題等を各セクション2時間で行っている。今回の「和食を説明しよう」という授業は試験的に試みたものである。前期で学習のペースをつかみ、後期は表現する、ディベートで筋道を話せるように練習を始めたところだ。双方向のやりとりをする意識づけをさせ始めたばかりなのでうまくいかなかったが、継続して行っていきたい。

本時の目的と手段をきちんと考えていない部分があった。和食のメニューを説明するために自分の一汁三菜を考えさせた。3クラスで行い、最初のクラスでは、ジャムボードで大変なことになったので、次のクラスでは2つから選ばせる形式にした。今日のクラスでは何を書いていいかわからない様子だった。自分の持っている英語力で日本語を知らない人に教えるためにはどう指導して行くべきかが今後の反省点である。生徒の目標がはっきりしなかったもので、不安が残ってしまったと考えている。

□付箋紙を使っでの意見交換

以下の3点について、良い点と改善点を参加者が説明しながら提示。

- ①「何ができるようになるか」を明確にした目標の提示
- ②ICT機器を活用し、主体性を高める工夫
- ③振り返りのタイミングと方法の工夫

<参観者意見>

①良かった点

- ・活動のモデルを示しているのが良かった。
- ・ディベート用ワークシートがよくできていた。音読用ワークシートは生徒が自分のレベルに応じて選ぶことができる点が良い。
- ・目標を達成する場面設定がなされていた。

①改善点

- ・具体的に料理の何を説明するべきかがわからなかった。
- ・モデル表現の中につなげ方に困るものもあった。
- ・3つのメニューで意見を出させて再度選ばせる方法もあるのではないかな。

②良かった点

- ・電子黒板のスライドが見やすく、和食のポイントがわかりやすかった。
- ・Jamboard の使い方に生徒が慣れていて、それを使うことで教師が生徒の成果を確認できる。
- ・生徒がタブレットを使いながら意欲的に取り組んでいた。

②改善点

- ・和食の利点の写真を映して、英語で先に述べさせてもよいのではないかな。
- ・写真が発話につながるとよい。何かを考えさせて、当てさせることでコミュニケーションにつながるのではないかな。
- ・和食の紹介内容をするはずが作り方になっている生徒も見られた。

③良かった点

- ・レビューシートがやるべきこと、自己評価が明確で分かりやすい。
- ・前時とのつながりが見える。

□指導助言（高校教育課 小林正英主任指導主事）

・英語教育推進班関連事業に協力していただいて感謝している。秋田グローバルネットワーク（3年目）、拠点校協力校として、新屋高校の研究授業に3名参加していただいた。来月の e-debate 交流会、出張イングリッシュキャンプの参加など幅広く生徒の英語力向上への取り組みにも感謝している。大須賀先生には研究授業、分科会ではより多くの意見を共有できるよう付箋紙を用いた KJ 法を提案し、たくさんの意見をいただいた。

<良かった点>

- ・大須賀先生のタイムマネジメントがよくてテンポよく進める手立て、振り返りしやすい点が丁寧であった。生徒が先生を見て授業を受け、先生を助けようとする雰囲気が良かった。日頃からの信頼関係が築けていると感じた。
- ・導入の帯活動、ディベートを含めた活動がよかった。テーマが授業の内容で生徒が内容に入りやすいものだった。生徒が話す時間が保たれていた。

<気になった点>

- ・生徒が即興的に話す場面がない点が気になった。生徒同士やりとりする場面が継続されればいいと思った。

＜指導助言＞

・生徒の成績が上がったのか気になったり、大学入試を合格させるために単語帳を使ったりして語彙力を定着させようとしているはずである。本当に力がつき、成績が伸びるかどう、卒業後に伸び続けるかを考えた時に今の授業で学びを深めることができるのかを一度立ち止まって考えていただきたい。

・成績を伸ばす一番の方法は自律的学習者を育てることである。授業で理解に偏った授業をしてしまうと解答をうつし、翻訳ソフトを使うことで足りる授業になってしまうので、生徒同士のやりとりを必ず入れることが大事である。自分で語れば、語る内容の分野が広がり、表現力も豊かになる。最初はずな言葉の繰り返し使うが、モデルとなる英語を使うことで表現力がつき、学んだ単語を使おうとするなどチャレンジするようになる。単語を覚えるのは受験のためでなく、アウトプットするためであると意識の変化をつけさせていくことが大事である。

・自信と英語を使う喜びをつけさせてほしい。流暢さを重視した方が授業の活性度が変わり、学ぶ意欲も高まり、視野も広がる。

・授業の導入でキーワードについて話せば、話題についての背景知識の活性化につながり、題材への興味関心が高まる。教科書の内容を読んだり、聞いたりすることでやりとりをさせ、深い学びにつなげてほしい。

・身近な話題について話させることも大事である。ディベートをする際は **should** や **is better** を使い、テーマの中でやりとりさせた方がおもしろいはずであり、新学習指導要領に沿った活動になる。

・教科書を使って、お互いの考えや体験を話させ、話題に対して深まりのある授業が魅力的である。

・やりとりをさせる題材として英検 2 次試験の問題、TOEIC Bridge のスピーキングがよい。これらを使うと挑戦しようとする。それが自律的学習者の育成の手助けになる。

・雑誌の間違い探しをさせるなど、いろいろな視点でやりとりさせることで自律的学習者を育てることが可能になる。そして、最も大事なことは英語を使う楽しさを体感させる授業をすることである。

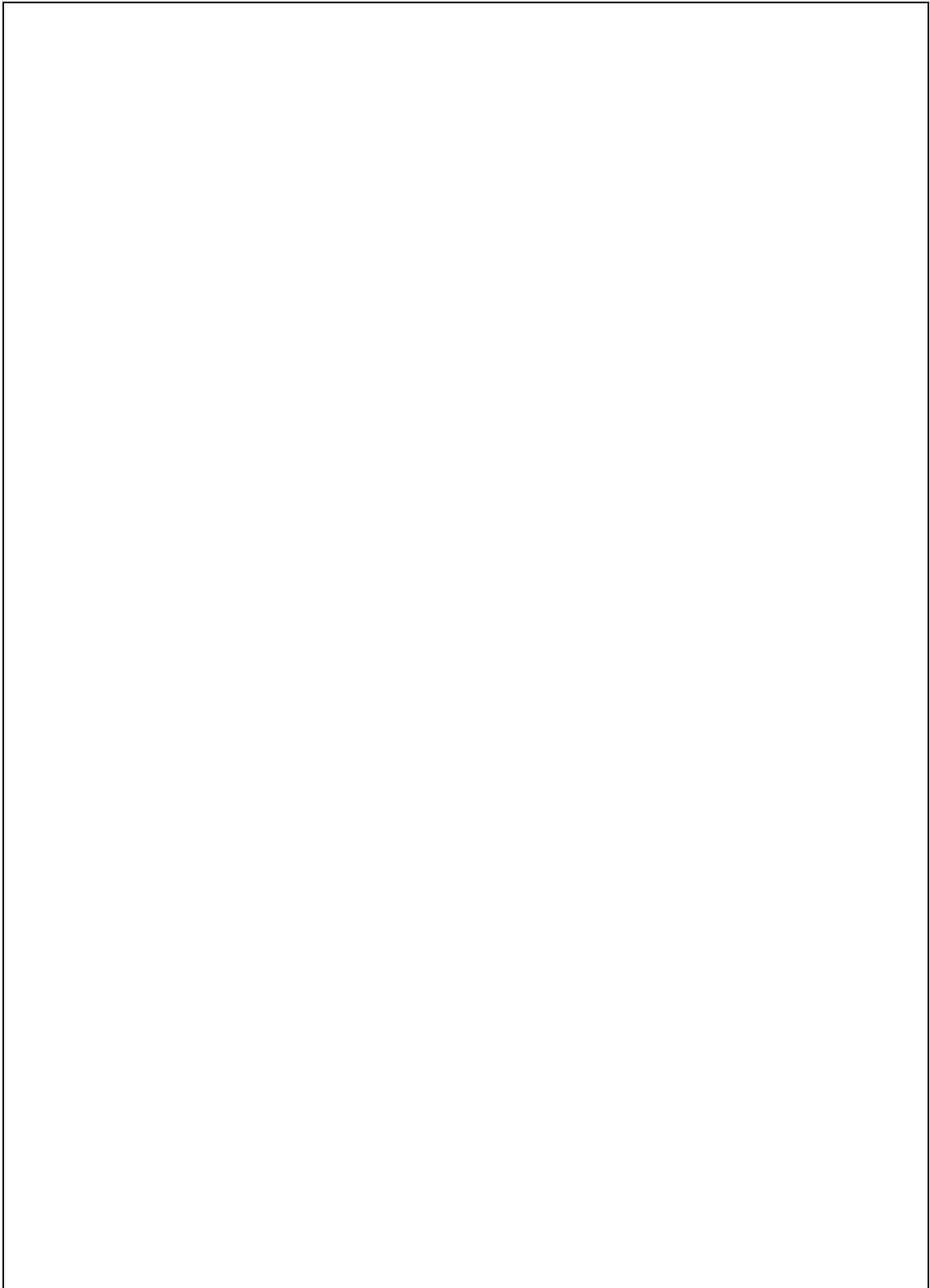
・秋田県の中小企業でも、優秀な人材を確保する土壌づくりとして、海外とのやりとりを増やし、英語の研修を取り入れるなどしている。民間も教育も優秀な人材を育て、地元に残すために英語に力を入れているのが現状である。

・「英語は苦手だが英語は好きだよ」という生徒の授業の入り口として生徒同士の英語によるやりとりをし、英語は楽しいという実感を持てるやりとりを工夫していただきたい。

・実践力を育て、挑戦させる機会がこの由利高校にはあるので、知識偏重の授

業ではなく、やりとりの多い授業をしてもらいたい。

- ・キャンドゥーの見直しにおいて、5 領域の中でスピーキングの比重を多くしてほしい。



令和3年度教育委員会指導主事等の学校訪問 全体会議事録

令和3年10月25日（月）

16:10～16:40

於 由利高校会議室

1 校長挨拶、指導主事等の紹介

指導主事の指導助言は法的根拠あり。助言を今後の授業改善に役立ててほしい。

2 分科会報告

国語 タブレットに小テストを配信し、敬語の知識を確認していた。一方で書くことも大事であり、今後の活用について活発な意見交換があった。

地歴 空中写真、地形図、3D等、資料の活用のしかたが多彩であった。災害を自分事として考えさせたり、ペアワークを活用したり、生徒が主体的に活動していた。一方で紙媒体の資料の扱いが苦手になってきている。

理科 目標の提示が明確で、教師と生徒が一体になり活動していた。スプレッドシートが活用され、ユニバーサルなデザインの授業であった。一方で教師の説明が多く、また生徒の実験技量の不足を感じた。

英語 ジャムボードやレビューシートなど、タブレットを活用した授業であった。タイムマネジメントができています。生徒が即興的にやりとりする、アウトプットする場面を設定していく必要あり。

3 指導主事より

伊藤指導主事

①授業参観の感想

下を向いている生徒が一人もおらず、普段の指導のたまものと感じた。教室環境も整っていた。生徒に力をつけたいという教師の気持ちが伝わってきた。表簿についてもほぼ完璧であった。今後もこの状態を維持してほしい。

②これからの授業、新しい学び

次年度から学習指導要領が変わる、授業も変わる必要がある。大事なことは教えすぎない、説明しすぎないこと。

- ア) 学びの連続性を持たせる、内容をまとまりとしてデザインする
- イ) 単元、授業のゴールを設定し、生徒と共有する
- ウ) 良質な発問を学習活動に位置づける

エ) 生徒が課題や疑問に向き合う時間を設定する

オ) 生徒が自らの変容に気づく手立てをつくる

③ICT の活用

まずはやってみることが大事。「クラウド上に2つめの教室がある」とイメージするとよい。

④生徒指導

初期対応が全て。初期対応を間違えると大きな事件に繋がる。生徒の問題行動の背景にはたくさんの人（友人、家族、近所の人など）がいることを意識することも大事である。

桜田指導主事

生徒の多彩な活動を支えている教員に感謝する。本時の目標の提示、ICT の活用など、学校全体としての取り組みが感じられる。生徒が教師を信頼していることが窺われる。

授業改善に取り組む姿勢について

- ①生徒の主体性を育むために、生徒が主役である授業作りをする。生徒が、何ができるようになるか。生徒が活躍する場面を意図的に設定し、生徒が達成感をもてるようにする。「させる」から「する」へ。
- ②発問、学習課題、簡単に答えられるものではなく、思考レベルを1段上げるような発問をする。生徒が本気になれば答えられない問いを教師も本気になって考える。
- ③漠然とグループ学習を行うのではなく、どのような視点を持ち、何をするのかを明確にした活動にする。

授業改善に終わりはない。生徒の主体性を育む授業改善を継続してほしい。キャリア教育と主体的な学びは密接な関連がある。授業におけるキャリア教育を継続してほしい。加えて学科の特色を生かした取り組みをしてほしい。

4 校長挨拶

授業改善が1丁目1番地。今後も授業改善に取り組んでいきたい。

2 研修報告

- A講座「教職5年目研修講座」
- A講座「初任者研修講座」
- B講座「育成する資質・能力から考える美術の授業」
- 令和3年度 カリキュラム・マネジメント開発研修

「教職5年目研修講座」を受講して

期 日 : <Ⅰ期>令和3年6月11日(金)
<Ⅱ期>令和3年9月 3日(金)
場 所 : 秋田県総合教育センター
氏 名 : 鳥井 拓弥

1 研修の目標

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る。

2 受講内容

Ⅰ 期

10:10～12:00 〈講義・演習〉教育相談と人間関係づくり
12:00～13:00 昼食:休憩
13:00～14:00 〈講義・演習〉学校組織の一員として ―マネジメントの視点―
14:10～16:15 〈講義・協議・演習〉生徒の実態を踏まえた授業改善①

Ⅱ 期

10:00～12:00 〈講義・演習〉発達障害のある生徒の理解と支援

※Ⅱ期はオンライン型研修として実施

3 受講のまとめ

研修Ⅰ期・Ⅱ期を通して、以下3点の気づきを得た。第一に、生徒理解を進める際に「円環的思考」に立ち、多面的な視点から生徒を理解するということである。これまで様々な生徒と接する中で、自身の中に経験として蓄積される半面、「前は～だった」というような考えに至ることがあり、今一度考えを改めるべきであると振り返る機会になった。発達障害のある生徒や、特別な配慮を要する生徒など、多様な生徒とより安心できる充実した学校生活を送るためにも、上述のことに十分留意して生徒と接していきたい。

第二に、教職5年目を迎える中、学校組織の一員として目標を達成するべく、自身が行うべき職務を明確にすることの重要性である。学校の教育目標達成にチームとして貢献していくためには、まず勤務校の背景や目標、教育資源などを十分に理解することが肝要である。研修において作成した「研修プレゼンテーションシート」は、自身の勤務校の特徴を再認識する良いきっかけとなった。

第三に、他校の先生方との授業研修を経て、授業方法やその背景にある考え方は大きな転換点を迎えていることを実感した。教師が情報を与え、作業させるような一方的な授業ではなく、生徒たちが主体的に学習内容に向き合い、試行錯誤しながら考えを深めていくような学びが求められている。ICT機器を使って生徒間や生徒―教師間のコミュニケーションをより円滑にする具体的な手立てについて、他校の先生方の実践から数多く学べたことは、自身の今後の授業改善に向けて大きな刺激となった。

これまで多くの方々の支えにより、本年度で教職5年目を無事迎えることができた。今後も研修等で学び続け、その学びを学校現場に還元して恩返しができるよう、尽力したい。

第2 学年 D 組 理科（物理）學習指導案

学 校 名 秋田県立由利高等学校

指導者 鳥井 拓弥

授業月日 8月25日(水) 3校時

使用教科書 改訂版物理 (数研出版)

1 单元名

第4章 1 運動量と力積 A運動量 ～ B運動量と力積の関係

2 本時の計画

(1) ねらい

- ・ 「着地する際の衝撃の大きさ」という観点から、力積の大きさについて、日常生活と関連づけて意欲的に学ぶことができる。(関心・意欲・態度)
- ・ 日常生活と関連づけて、運動量と力積の量的な関係性について理解することができる。

(思考・判断・表現)

(2) 展 開

	学習活動	指導上の留意点	評 価
導入 5分	1 地面に着地する際の衝撃を抑えるための方法について、2人1組で意見を出し、プリントに記入する。 2 本時のねらいを設定し、プリントに記入する。 着地の衝撃を抑えるための方法を数式から考え出そう。	・ 手がかかりとして、「パルクール」の動画を視聴させ、着地の仕方に着目して観察させる。 ・ 数名の生徒の意見を板書で示し、クラス全体に共有する。 ・ 生徒から出た意見を類型化し、大まかな予想をまとめておく。 例) 受け身をとる、膝を曲げる、クッション性の高い靴を履くなど	着地の衝撃を抑える方法について、自身の考えをプリントに記入することができる。 (関心・意欲・態度)
展開 35分	3 本時の学習内容について解説を聞く。	・ 事前に Google Classroom に投稿された、生徒からの質問事項を電子黒板に投影し、解説の際に言及する。 ※ 生徒は事前に別添資料1を参考に、本時の授業プリントに関する質問を Google Classroom に投稿する	手立て1 手立て2

	4 4人1グループとなり、演習問題に取り組む。 ※ 必要に応じて、Google Classroom に掲示されたヒントカードも参照する。	- 以下の2点に留意し、机間指導を行う。 (1) 早く解き終わった生徒には、周囲の生徒との教え合いを促す。 (2) 手が止まっている生徒に助言し、つまづきやすい点については適宜クラス全体に共有する。	
	5 演習問題の解説を聞いて、自身の解答と照らし合わせる。	解説をする際は、図表を電子黒板で投影して拡大し、書き込みをしながら提示する。	
まとめ	6 本時で学習した内容を踏まえ、着地の衝撃を抑える方法について、自身の言葉でまとめる。	机間指導を行い、力積の式「$(力積) = F\Delta t$」の意味や、「力積を小さくするにはどうすればよいのか」といった視点を示すことで、生徒の思考を促す。	自身の言葉で、「力が加わる時間」に触れながら、本時のまとめを記入することができる。(思考・判断・表現)
5分	地面との接触時間を長くすると、着地の衝撃を抑えることができる。		

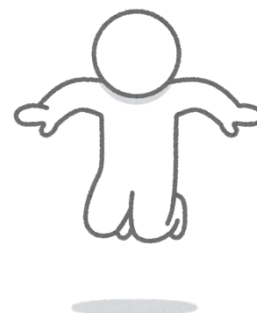
I 期テーマ：「生徒の思考を深める授業展開についての工夫と実践上の課題」	
課題	学習内容に対して疑問点をもつことができるようにする指導や工夫 手立て1 授業内容を吟味し、疑問点を見つける時間を確保できるよう、授業前に次回用いるプリントを提示し質問を募る 手立て2 授業内容についてどのように疑問点を挙げれば良いか具体的に資料で提示する

力学 運動量 01 運動量と力積 インプット資料

<本時の目標>

導入 高いところからジャンプして着地するとき・・・

高いところからジャンプをして着地しようとする、足には相応の衝撃が伝わる。この衝撃を和らげるために、どんな工夫ができるだろうか？自由な発想で考えよう！



学習

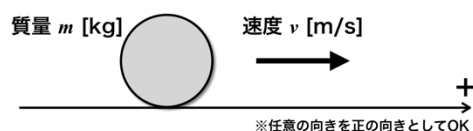
○物体の衝突と運動量

人がジャンプして着地するとき、人と地面は「衝突」している。2物体の衝突などでは、物体の運動の勢いを表す物理量である、「運動量」を考える。

$$\text{運動量 } p = mv \quad (\vec{p} = m\vec{v})$$

p : 運動量[kg・m/s] m : 物体の質量[kg] v : 物体の速度[m/s]

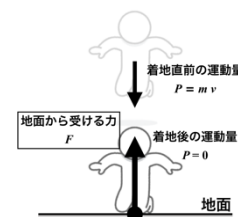
※運動量は速度と同じく、ベクトル量である。



例えば、人がジャンプして地面に着地するとき、地面に衝突後は静止すると考えると・・・

→鉛直下向きの運動量をもっていた人が、着地して運動量が0になる。

このように1つの物体の運動量は、衝突などによって運動の前後で変化する。



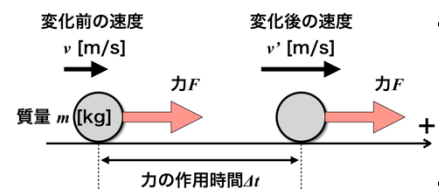
○運動量の変化と力積

<物体が衝突して運動量が変化するとき>

F : 物体にはたらく力[N] Δt : 力の作用時間（はたらいた時間）[s]

m : 物体の質量[kg] v : 物体の速度（力がはたらく前）[m/s]

v' : 物体の速度（力がはたらいた後）[m/s]



物理基礎で学習した「運動方程式 $ma = F$ 」を用いて、次のように関係式を導き出せる。

加速度 a について
$$a = \frac{\Delta v}{\Delta t} = \frac{v' - v}{\Delta t}$$

この式を運動方程式 $ma = F$ に代入して

$$m \cdot \frac{v' - v}{\Delta t} = F \Leftrightarrow F \Delta t = mv' - mv$$

$$F \Delta t = mv' - mv \Leftrightarrow (\text{物体が受けた力積}) = (\text{物体の運動量の変化})$$

力積 $F\Delta t$: 物体に加えた力 F と力がはたらいた時間 Δt の積。これにより物体の運動量が変化する。
この式から、物体に加えられた力積は、物体の運動量の変化に等しい！！

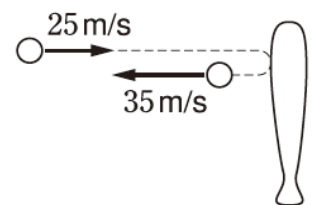
力学 運動量 01 運動量と力積 アウトプット資料

問1

- (1) 質量 2.0kg の物体が、東向きに 1.4m/s の速さで進んでいる。この物体の運動量の大きさと向きを求めよ。
- (2) 質量 4.0kg 、速度 2.0m/s の台車に、速度と同じ向きに 5.0N の力を 2.0 秒間加えると、速度は v' $[\text{m/s}]$ となった。 v' を求めよ。

問2

右向きに 25m/s の速さで飛んできた質量 0.15kg のボールをバットで左向きに速さ 35m/s で打ちかえした。



- (1) ボールに与えられた力積の大きさと向きを求めよ。
- (2) ボールとバットの接触時間を 0.010 秒とすれば、バットがボールに加えた平均の力の大きさ F は何 N か。

本時のまとめ

人がジャンプして、地面に着地するときに受ける力の大きさを考える。

仮に 60kg の人が高いところからジャンプして、着地直前の速度が鉛直下向きに 10m/s 、着地時には静止する考える。この人が地面から受ける力 F を小さくするためには、何の値を変えればよいだろう。早くできたら、具体的な方法も示してみよう。

<自分の言葉で（数式などを用いてもよい）>

力学 運動量 01 運動量と力積 アウトプット資料

ヒント

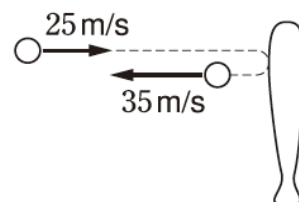
問1

- (1) 質量 2.0kg の物体が、東向きに 1.4m/s の速さで進んでいる。この物体の運動量の大きさと向きを求めよ。
- (2) 質量 4.0kg 、速度 2.0m/s の台車に、速度と同じ向きに 5.0N の力を 2.0 秒間加えると、速度は v' [m/s] となった。 v' を求めよ。

問2

右向きに 25m/s の速さで飛んできた質量 0.15kg のボールをバットで左向きに速さ 35m/s で打ちかえした。

- (1) ボールに与えられた力積の大きさと向きを求めよ。
- (2) ボールとバットの接触時間を 0.010 秒とすれば、バットがボールに加えた平均の力の大きさ F は何 N か。



令和3年度高等学校初任者研修講座を受講して

由利高等学校
保健体育 土井 さくら

1. はじめに

本稿では、今年度を受講した初任者研修講座について、その内容を報告する。本研修では、教科指導に関する研修はもちろんのこと、近年の教育的課題や日頃の業務に関する研修など内容が多岐に渡っている。そのため、以下「校外研修」と「校内研修」とに分けて、報告したい。

2. 校外研修を受講して

(1) 総合教育センター研修

総合教育センター主催の初任者研修講座は、Ⅰ期からⅨ期までの計9回受講した。新型コロナウイルス感染症対策として、総合教育センターでの研修以外にオンライン研修や課題提出による自主研修など様々な形態ではあったが、教員としての基礎的・基本的な指導力を養うことができた。Ⅶ期の授業実践研修では、授業実践・参観及び協議を行い自身の授業改善に役立てることができた。Ⅰ期からⅥ期で学んだ「授業づくりの基本」や、「教科における基本的な指導技術と授業展開」を生かして教材研究や指導案作成など事前の準備に力を入れた。授業実践では、授業規律や授業展開について改善点が見つかり、生徒に気付かせるような発問や、生徒がなぜだろうと悩むような場面を意図的に作り、生徒の思考を働かせる授業の工夫が必要だと考えた。また、教科指導だけでなく、特別な支援を要する生徒への理解やキャリア教育といった近年の重要な教育的課題や、いじめ問題や不登校についての理解など、教員として不可欠な知識・教養を身に付けるための講義・演習が充実しており、非常に有意義な時間となった。

同じ初任者が集まる機会でもあり、日頃の悩みや実践の共有ができる場としても、初任者研修講座は私にとって重要なものとなっていた。今後も交流を続けながら、励まし合い、成長していきたいと考えている。

(2) 特別支援学校訪問

特別支援学校訪問として、9月にゆり支援学校を訪問し、寄宿舎見学や授業参観、特別支援教育について講話をして頂いた。実際に学校を訪問して現場を見ることで感じることも多くあった。どの教室にも、発達段階に合わせて、その日の日程や1週間のスケジュールなどが分かりやすく掲示されており、見通しを持って1日を過ごせるように工夫されていた。通常の学級と比べると、とても手厚いという印象を受けたが、今回目にした光景はゆり支援学校では当たり前であり、全ての生徒に分かりやすい授業ということをもう一度自分の授業にも当てはめて考えていきたいと感じた。

これからは、ますます特別支援教育への理解が必要になり、私も障害のある生徒と関わる機会が増えてくるはずだ。生徒の苦手なことは、教師の工夫やチームとしての対応で、ある程度取り除くことが可能であると学んだ。できることや得意なことを生かして自己肯

定感を高め、障害がある生徒も共に学んでいける学校を目指したい。見通しを持つ、視覚的に示す、合理的な動きを取り入れるなど、研修で学んだポイントは今後の授業改善にも役立てていきたい。様々な指導の在り方、生徒の様子を観察できたことは、自身の教員としての視野を広げる貴重な体験であった。

3. 校内研修を受講して

(1) 一般研修

管理職の先生方や各分掌の主任の先生方に多くの御協力をいただき、日頃の業務の進め方だけではなく、進路指導や特別活動、生徒指導などの様々な本校の特色についても学ぶことのできる機会を用意していただいた。本県での教員生活1年目の私にとっては全ての研修が新鮮で、新しく学ぶ知識ばかりであり、丁寧に指導して下さった由利高校の先生方に感謝申し上げたい。また、教務に関する事柄や危機管理体制について等、日頃の業務だけではあまり実感することのない内容について学ぶ機会を設けていただけて、これからの教員生活に生きる大変重要な研修であった。これらは、教科指導での成績処理や緊急時の対応等に生きるものであり、かつ学校ごとに若干異なるものでもある。本校だけでなく、今後他校へと勤務することになった際には、教えてもらうという受け身の姿勢ではなく、自分で情報を確認し理解できるよう努めたい。

(2) 教科研修

教科研修では、教科指導員として日々御指導してくださった斎藤淳一先生をはじめとして保健体育科の先生方から御協力・御指導いただいた。また、他教科の先生の授業も参観させていただき、ICT機器の活用や、授業で生徒が自ら考える姿を見て、自身の授業に取り入れることができた。

成績処理にあたって、実技科目である体育の評価を点数化するのは大変難しいと感じた。技能だけで評価しないよう、体育ノートや関心・意欲・態度の配点も高く設定されている。授業でスキルテストを実施した際も、評価する先生によって評価にズレが生じないよう基準を設定しながら評価し、点数化した。来年度からは新教育課程の評価が導入されるため、初任者研修で学んだことを生かし指導計画や評価方法を十分に練っていきたい。

今年度は新型コロナウイルス感染症対策として接触の少ないネット型の球技を中心に授業を行った。来年度以降、今年度実施できなかったソフトボールやバスケットボール、フットサルなどの球技や武道等を行うことができれば、教材研究を十分に行い、各種目の特性を生かして運動の楽しさを感じることができる授業を展開したい。

4. おわりに

研修担当の野澤幸子先生、教科指導員の斎藤淳一先生をはじめ、本当に多くの先生方の御理解・御支援のもとで、1年間の初任者研修を終えることができ、心から感謝申し上げたい。現在の教育は不変的なものでなく、新しいもの、より良いものに変化していくため、教員も常に学び続け、変化に対応していく力を付けていきたい。

保健体育科「保健」 学習指導案

日 時：令和2年10月5日(火) 4校時

場 所：2年B組教室

対 象：第2学年普通科B組

授業者：土井 さくら

1 単元名 保健・医療制度及び地域の保健・医療機関 ㊦医薬品の制度とその活用

- 2 単元の目標
- (1) 保健・医療制度などの適切な活用の仕方や、疾病からの回復や悪化の防止には、医薬品を正しく使用することが有効であることについて理解できるようにする。(知識)
 - (2) 医薬品の制度とその活用について、医薬品には承認制度があり、販売に規制が設けられていることと関連付けながら、生活の質の向上のために利用の仕方を整理することができるようにする。(思考力, 判断力, 表現力等)
 - (3) 保健・医療制度や医薬品について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとすることができるようにする。(学びに向かう力, 人間性等)

3 単元と生徒

(1) 単元観

本単元「医薬品の制度とその活用」は、「保健・医療制度及び地域の保健・医療機関」の中の一つである。この単元は、保健・医療制度や地域の保健・医療機関の活用に関する方法を学ぶとともに、医薬品は有効性や安全性が審査されており、正しく利用することが有効であることなどを中心に構成された単元である。

(2) 生徒観

生徒は男女問わず仲が良く、学級全体に温かい雰囲気がある。保健体育科に関する知識や技能については十分に身に付いている生徒とそうでない生徒がいるが、興味・関心をもって取り組む生徒が多い。保健の授業中はおとなしい印象であるが課題について考えたり、調べたりする活動に積極的に取り組んでいる。

(3) 指導観

多くの生徒にとっては、医薬品は普段の日常生活の中で使用したり、薬局や薬店・ドラッグストア等で見たり、テレビや新聞等の宣伝で見たりするなど、身近な存在であると考えられる。

本時では、医薬品の分類や、販売に規制があることについて、ドラッグストアの医薬品を例に理解を促す。また、実際の添付文書を読み、記載されている注意事項をまとめ、医薬品の正しい使用法について理解できるようにする。そして、今後の生活で医薬品を購入する際に、個々の医薬品の特性を理解した上で、使用法に関する注意を守り、正しく使用できるようにすることを目指したい。

4 単元計画

主 な 学 習 内 容	第1時(本時)	第2時
	㊦医薬品の制度とその活用	
	○医薬品は、医療用医薬品、要指導医薬品、一般用医薬品の3つに大別され、販売に規制が設けられていること。 ○疾病からの回復や悪化の防止には、個々の医薬品の特性を理解した上で、使用法に関する注意を守り、正しく使うことが必要であること。	○医薬品は、承認制度によってその有効性や安全性が審査されていること。 ○副作用について、予期できるものと予期できないものがあること。

5 本時の計画（1／2）

（1）内容：医薬品の制度とその活用

（2）本時のねらい：医薬品の分類と正しい使用法について理解できるようにする。

（知識）

（3）展開

時間	学習内容・学習活動等	指導上の留意点	評価【観点】（方法）
導入 （10分）	1 ドラッグストアの商品の中から、医薬品とその他を分類する。	・生徒が興味・関心をもてるように実物を提示する。	
展開 （30分）	2 本時の目標を確認する。 医薬品の分類と正しい使用法について理解しよう。 3 医薬品の分類について理解する。 4 医薬品の正しい使用法について理解する。 5 医薬品の添付文書から正しい使用法を読み取りまとめ、説明する。	・医薬品は、医療用医薬品、要指導医薬品、一般用医薬品の3つに大別され、販売に規制が設けられていることについて例をあげて説明する。 ・医薬品の分類がイメージできるように図を提示する。 ・生徒が覚えやすいようにICTと学習シートを併用する。 ・生徒が学習シートに記入しやすいように読み取る事項を例示しておく。 ・5種類の医薬品と添付文書を用意し、隣同士、違う医薬品の情報を共有できるようにする。	【知識】 ・医薬品の種類について整理し、医薬品の正しい使用法について学習シートにまとめている。 （学習シート・確認問題）
まとめ （5分）	6 本時のまとめをする。 ・確認問題を行う。	・本時の学習内容を確認問題で復習し、次時の学習につなげる。	

医薬品とその活用

()組()番 氏名 _____

【目標】

() の () と正しい () について理解しよう。

Q1 医薬品だと思うものに○をつけてみましょう。

①



②



③



④



⑤



Q2 違いは何？

1 医薬品の分類

病気の

- ・ 医師・歯科医師の _____
- ・ _____
- ・ 薬局の _____ から薬を購入

_____ 医薬品から _____ 医薬品
に転用されたばかりの薬

- ・ _____
- ・ _____ などで
自分の責任で購入

第 類医薬品

第 類医薬品

第 類医薬品

2 医薬品の正しい使用法

①

④

②

⑤

③

☆薬の説明書を読み、正しい使用法をまとめてみよう！→隣の人にも説明しよう！

○薬の名称・分類

○効能

○用法

○用量

○服用時間

○形状

○併用

確認問題

次の文のうち、正しいものには○を、間違っているものには×を書きなさい。

- ①医薬品は体が本来もっている自然治癒力をおさえ、さらに強力な薬の力で治していくものである。
- ②カプセル剤は大きくて服用しづらいので、飲みやすいように形状を変えるなど、工夫をしてもよい。
- ③一般用医薬品は処方せんがなくても購入できる。
- ④薬剤師に相談すれば、医療用医薬品も購入できる。

① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____

「育成する資質・能力から考える美術の授業」を受講して

期 日 : 令和2年9月24日(金)

配信場所 : 秋田県総合教育センター

氏 名 : 山岡 美佐子

1 研修の目標

具体的な指導事例を参考にしながら、校種間を貫いて育成する資質・能力について考え。実践的な指導力を高める。また、実際に浮世絵や工芸作品にふれ、美術鑑賞の授業についての理解を深める。

2 受講内容

▶【講義・協議】これからの美術科・芸術科（美術）の授業づくり

秋田県総合教育センター 指導主事 小森 哉子

▶【講義・協議】美術の力について

秋田公立美術大学 美術教育センター 教授 尾澤 勇

3 受講のまとめ

県学習状況調査によると、図工・美術の学習に対する本県の小・中学生の意識は、総じて肯定的である。特に中学校においては、顕著な上昇傾向があり、「好き」という回答が平成16年度の中学校2年生が6割程度であったのに対し現在は8割以上に達している。しかし、「好きと回答した理由」として「将来社会に出たときに役立つ」「生活の中で役立つ」と答えた割合がどの年齢段階でもおよそ2～3%程度となっており、この数値を上昇させていくことが本県の図工・美術教育の課題である。この課題の解決は、今回の学習指導要領改定の方針性である新しい時代に必要となる資質・能力（学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等、生きて働くの知識・技能、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等）の育成とも重なる。新学習指導要領を踏まえたうえで、児童生徒が「生活や社会で役立つ」という実感を豊かにしていくことが、今後目指すべき授業改善の在り方である。

新学習指導では、これまでは小・中学校のみに示されていた〔共通事項〕が、高等学校芸術科（美術、工芸）においても、造形的な視点を豊かにすることを目指し、表現と鑑賞の学習に共通に必要な資質・能力として新たに示された。この〔共通事項〕を適切に位置づけた題材や指導計画に基づき、実感を伴いながら造形的な知識や視点を身に付けさせ、それを活動に生かすことができるように指導を工夫していく必要がある。その方法としては言語活動の視点を取り入れることが効果的である。具体的には、スケッチに図や言葉も用いて表し思いをまとめやすくする、鑑賞者に説明するための作品カードを作成し、表した思いやその方法を述べることで、自己の作品のよさに気づきやすくする等である。このような工夫を通し、表現及び鑑賞に関する資質・能力を高めるよう授業改善を図っていくことが大切である。

令和3年度カリキュラム・マネジメント開発研修 報告

期日：令和3年12月10日（金）

令和3年12月15日（水）

令和3年12月17日（金）

場所：秋田県立由利校高等学校

（オンライン研修）

氏名：相場 康太郎

1 目 的

学校は、地域や学校の実態等に即し、学校の資源、特色を生かした適切な教育課程を編成し、実施する必要がある。新学習指導要領においても、「カリキュラム・マネジメント」の重要性が特に示されている。本研修では、新学習指導要領に基づいて、学校において、校長のリーダーシップの下、組織的、計画的に「カリキュラム・マネジメント」を展開するための手立て、カリキュラムの自己点検・評価に関する手法等を習得する。そして、1）各学校における教育課程の編成・実施の改善に関する専門的知見を活用して組織的な取組を推進する力、2）学校や地域の教職員の「カリキュラム・マネジメント」に関する専門性向上を推進する力、を育成する。

2 主 催 独立行政法人教職員支援機構

3 共 催 文部科学省

4 実施方法 学習管理システムを用いたオンライン研修

5 配 信 元 独立行政法人教職員支援機構 つくば中央研修センター
〒305-0802 茨城県つくば市立原3番地

6 研修日程

○12月10日（金）

【第1講】講義・演習

「生きる力」の理念の具体化とカリキュラム・マネジメント

ー学習指導要領総則の規定を中心にー

文部科学省初等中等教育局教育課程課 学校教育官 能見駿一郎 氏

【第2講】講義・演習

学校現場におけるカリキュラム・マネジメントの意義

千葉大学 名誉教授 天笠 茂 氏

○12月15日（水）

【第3講】講義・演習

カリキュラム評価の重要性とマネジメントサイクル

大阪教育大学 教授 田村 知子 氏

【第4講】講義・演習

カリキュラム実践のための組織化

上越教育大学 教授 安藤 知子 氏

○12月17日（金）

【第5講】講義・演習

カリキュラム改善に必要な条件

千葉大学 名誉教授 天笠 茂 氏

【第6講】事例発表・解説

カリキュラム・マネジメントの具体的展開

（事例発表）

宇部市立上宇部中学校

コミュニティ・スクールの仕組みを生かしたカリキュラム・マネジメント

～社会に開かれた教育課程の実現に向けて～

宇部市立上宇部中学校 校長 藤井 一憲 氏

（解説）千葉大学 名誉教授 天笠 茂 氏

【第7講】講義

カリキュラム・マネジメントの可能性と課題

【第8講】演習

研修全体のリフレクション

教職員支援機構 特別研修員 岡本 剛典 氏

7 研修報告

【第1講】「生きる力」の理念の具体化とカリキュラム・マネジメント

ー学習指導要領総則の規定を中心にー

(1)「生きる力」の理念の具体化と新学習指導要領

- ①「生きる力」は、平成8年7月に中教審から示された。
- ②H28.12.21中教審答申において、「生きる力」とは何かを資質・能力として具体化し、各学校における教育課程の検討・改善と、指導の充実を図ることの重要性が示され、学習指導要領改訂の必要性が示された。
- ③生きる力を理念に終わらせないために、学校での学びと実生活・実社会との接続、言語能力の確実な育成が求められる。
- ④実生活・実社会で生きて働く力の育成、教科等で学んだことを組み合わせて実生活・実社会に生かすという点で、日本は外国から遅れをとっている。
- ⑤言語能力の育成は「カリキュラム・マネジメント」と密接に関わっている

(2)カリキュラム・マネジメントの3つの側面を生かした学校づくり

●カリキュラム・マネジメントの3つの側面とは

- ①教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

①について

- ・教育課程全体を見渡した指導により、各教科等の個別の指導内容が児童生徒の中でつながることで、実社会で生きて働くものとなることが期待される。
- ・教師にとって、他教科等での指導内容を知ること、自分が担当する教科等との関係や関連を意識した指導が期待される。

②について

- ・各学校における教育活動は、
 - (i) 学習指導要領等に従い、児童生徒や地域の実態を踏まえて編成した教育課程の下で作成された各種指導計画に基づく授業（「学習指導」）として展開される。（PLAN、DO）
 - (ii) 各学校は、日々の授業の下で 児童生徒の学習状況を評価し、（CHECK）
 - (iii) その結果を「児童生徒の学習や教師による指導の改善」や「学校全体としての教育課程の改善」、「校務分掌を含めた組織運営等の改善に生かす」（ACTION）中で、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っている。
- ・「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っている。
- ・学習評価を踏まえた改善としては、例えば、教科等・学年の各種指導計画の改善並びに、各種全体計画、教育課程編成の方針、学校のグランドデザインや学校経営方針など指導の改善や学校としての教育課程の改善に係る諸計画等が考えられる。

③について

- ・学校の運営組織を生かす ―役割分担と連携―
- ・学校教育目標と学年目標、学級目標について、学年間・教科間の縦糸と横糸をうまく紐付けることが大事。
- ・人的・物的体制を考える手法（例：SWOT分析）

SWOT分析とは

学校内部の「強み(Strength)」と「弱み(Weakness)」を明らかにするとともに、学校を取り巻く外部環境を「機会(Opportunity)」と「脅威(Threat)」に分類・整理することにより、特色ある学校づくりや自校の課題を解決するための戦略を構築し、評価する体系的手法。

(3)カリキュラム・マネジメントと学校評価

●中央教育審議会答申より

- ・学校評価についても、子供たちの資質・能力の育成や「カリキュラム・マネジメント」と関連付けながら実施されることが求められる。
- ・学校評価の営みは、「カリキュラム・マネジメント」そのものであると見ることもできる。

【第2講】学校現場におけるカリキュラム・マネジメントの意義

(1)カリキュラム・マネジメントの背景

●カリキュラム・マネジメントについては、今回の学習指導要領改定以前から動きがあった。

- ・ 1977（昭和52）年の学習指導要領改訂
- ・ 1998（平成10）年9月1日中央教育審議会「今後の地方教育行政の在り方について」
- ・ 2000（平成12）年12月2日教育改革国民会議報告—教育を変える17の提言
- ・ 2005（平成17）年度 第2回中堅教員研修
- ・ 2006（平成18）年度 カリキュラム・マネジメント研修
- ・ 2011（平成23）年度 カリキュラム・マネジメント指導者養成研修
- ・ 2019（平成31）年度 カリキュラム・マネジメント指導者養成研修
- ・ 2021（令和3）年度 カリキュラム・マネジメント開発研修

(2)学習指導要領改訂とカリキュラム・マネジメント

①「社会に開かれた教育課程」という理念

- ・ 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ・ これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ・ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

②マネジメントの技法としてのカリキュラム・マネジメント（3つの側面）

- ・ 学習の基盤となる資質・能力や、現代的な課題に対応できる資質・能力の育成に向けて、教科等や学年の枠組みを越えた横断的な視点で学びを組み立てる。
- ・ 全国学力・学習状況調査や体育・運動能力調査、アンケートなどの各種の調査結果等を活用してPDCAサイクルを実施し、指導の効果の確認と改善を図る。
- ・ 限られた資源の有効な活用。

(3)めざす姿—まずは、教育課程（カリキュラム）—

①教育課程とは、学校教育の目的や目標を達成するために、総合的に組織した学校の教育計画

②教育課程の構成要素

- ・ 教育理念・育てたい資質・能力など

- ・組織配列した教育内容（各教科等の指導計画など）
- ・配当した授業時数
- ・教材・教具・施設・設備

③全ての教職員で取り組むカリキュラム・マネジメントのステップ

- ・わが校の実態や課題の把握・・・・・・・・・・子どもの実態・組織の診断
- ・教育課程に育成する資質・能力を位置づける・・・課題を教育課程に位置付ける
- ・カリキュラム・マネジメントの三つの方策・・・・・・・・カリキュラム・マネジメント
- ・協働という組織、文化の創造・・・・・・・・つなげる・つながる

④全ての教職員で学校を創る

- ・これからの時代に求められる資質・能力の育成には、「各教科等の内容と教育課程全体とを往還させる」「必要な資源を再配分する」ことが必要
- ・カリキュラム・マネジメントは、学校経営・学年経営・学級経営の往還を図る
- ・カリキュラム・マネジメントは、全ての教職員の参加・参画によって、学校の特色を創り上げていく営み

(4)いわゆる3つの側面

①教科等横断

- ・現代的課題と年間単元・題材配列表
- ・言語活動の充実（横串をさす）
- ・国語科が、中心的役割を担いながら他教科等と連携して言語能力の向上を図る。
- ・国語科が育成する資質・能力が各教科等において育成する資質・能力の育成にも資する。
- ・21世紀型の資質・能力の育成には、一つの教科等をもって単独で迫れるものではない。
- ・教育課程を構成するすべての教科等が、それぞれの役割を果たす。
- ・連携と横断によって育てる。

②PDCAサイクルの確立

- ・学校教育目標と教育課程と諸計画をつなぐ
- ・授業の振り返りを組織的な営みとして位置づける
- ・カリキュラム・マネジメントと学校評価をリンクさせる

③ヒト・モノ・カネ・情報・時間など経営資源の投入

- ・すべての職種の経営参加
- ・学校事務職員、養護教諭、栄養職員などと学級担任、教科担任との連携
- ・教務主任のリーダーシップとミドルリーダーとの協働
- ・地域の人々の参加

- ・時間という経営資源
- ・教育課程を核に協働する組織文化の形成

(5)改めて、めざす姿 ～全ての教職員で各学校の特色を創り上げる～

- ①カリキュラム・マネジメントは、教育課程（カリキュラム）の編成・実施・評価を中心に、全ての教職員の参加・参画によって、学校の特色を創り上げていく営みである。
- ②管理職・ミドル・若手それぞれの立場からのカリキュラム・マネジメントへの関わり
 - ・若手の授業と学級経営からの参加・参画
 - ・ミドルによるコーディネートとリーダーシップ
 - ・学校事務職員による校長の補佐、教職員との連携と分担
 - ・管理職によるビジョン・グランドデザインの提示

【第3講】カリキュラム評価の重要性とマネジメントサイクル

(1)「評価を核にする」理由

- マネジメントサイクルで、カリキュラム評価が重視されるのはなぜか？
 - ・課題を明らかにすることにより、方向性を決定・共有できる
 - 子どもや学校の実態を踏まえてカリキュラムを開発・編成・実践する
 - ・一般に、学校は毎年「ゼロ」からカリキュラムを編成するわけではない
 - ・現行のカリキュラムをより効果的・適切なものへ改善・更新するため
 - ・計画段階で評価のことまで設計することにより、目的や目標を見失わず、適切な評価ができる（逆向き設計）
 - ・学びをマネジメントすることが目的である

(2)「カリキュラム」の概念に内在する評価の必要性

①本来は、カリキュラム≡教育課程

「教育課程」・・・「教育計画」の意味合いが強い（行政用語）

「カリキュラム」・・・「子どもが実際に学んだこと」まで含む（研究用語）※より広い意味

②カリキュラムとは「子どもの学びの総体」（広義のとらえ）

- 同じ教育計画、同じ授業でも子ども個々には結果として「個別カリキュラム」を形成する
- 子どもが本当に何を学んだか、学ばなかったかを明らかにする必要がある
- カリキュラムマネジメントは子どもの目線を大切にした「学びのマネジメント」であり、評価を核としたマネジメントサイクルが必要

(3)評価の対象、構造

①カリキュラム評価

- ・カリキュラムの目標が達成されたか → 目標にもとづく評価
- ・カリキュラムの実際の効果はどうか → 目標にもとづく評価＋目標にとらわれない評価

②マネジメント評価

- ・カリキュラムの開発や実施に必要な手続きや組織、条件整備、コストなど
(持続可能性、働き方改革、横展開可能性)

③カリキュラム評価の目的・タイミング

- ・カリキュラムの実施中の評価・改善 → 構成的（形成的）評価
- ・単元終了後や年度末の評価 → 総括的評価

(4)マネジメントサイクルはルーティンワークか？創造・開発の過程か？

- ・ルーティンワークではない。子どものために行うこと。
- ・「課題」を「ネガティブな問題」と捉える必要はない。「課題を発見できた」「設定できた」とポジティブに。
- ・課題だけでなく、成果や良さとその要因を明らかにすること、共有する（広げる）ことや継続することも必要（達成感は次へのエネルギーへ）
- ・多様なマネジメントサイクル
 シングル・ループ学習とダブル・ループ学習
 OODA（ウーダ）ループ
 AARサイクル など

(5)カリキュラム評価の方法（事例）

- ・1つの行事でPDCAサイクルをまわし、改善策を次の行事に生かす
- ・単元配列表を活用した評価・改善
- ・総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメント研修
- ・館山市立北条小学校のカリキュラム管理室
- ・生徒と教師の協働による学習活動の評価と改善案

(6)学校評価とカリキュラム・マネジメントとの連動

- ①学校評価とカリキュラム・マネジメントは関連づけられているか。
- ②学校評価の問題点

- ・項目が多い ・項目が網羅的 ・原因を十分に特定できないまま改善しようとする
 - ・管理職と教職員の意識のズレ（教職員の当事者意識の低さ）
- ③評価結果を全教職員で共有化し改善方針を全員で考えるプロセス。
- ④PDCAのスパン
- ・年度を跨ぐ問題点（3月末は繁忙期、校長・教職員の入れ替わり）
 - ・9月～8月を1サイクルに（組織としての継続性確保、翌年度の教育活動を組織的にじっくりと検討）

(7)まとめ～コミュニケーションとしての評価

- ①複数の評価者がそれぞれの主観的なみとりや判断を持ち寄ってすり合わせるにより、合意可能な判断を求めていく「間主観性」も重要となる。
- ②カリキュラム・マネジメントに関わる評価を「追加する」のではなく、既に学校にある学校評価、会議、授業研究等をカリキュラム・マネジメントの視点で見直してリデザインする。
- ③目的を見つめて、多様な関係者とビジョンや教育活動を共有し、コミュニケーションとしての評価を通して、当事者としての関与を促し、「社会に開かれた教育課程」実現へつなげる。

【第4講】カリキュラム実践のための組織化

(1)カリキュラム・マネジメントとは何か

①教育課程とカリキュラム

(i)カリキュラム・マネジメントのイメージ

- ・総合の時間での学習内容を意識して、国語や算数の時間と関連づける。
- ・地域の活性化活動とタイアップできるように、総合の時間の学習内容を工夫する。
- ・外部講師を招いて、子どもたちが実感を持ちながら学習できるように従来の学習単元の内容改善を試みる。
- ・教科書に沿った単元展開を生徒の興味関心にあわせて入れ替え、効果的にALTと連携する。
- ・キャリア教育の推進を学校課題の中心テーマとして、全教科で「キャリア発達の4領域8能力」を意識した授業展開を進める。
- ・一人一台端末を活用する学びの在り方を教科横断で検討し、全校で推進する。

…等々

(ii)カリキュラムの概念

教育課程 =教育計画全般、年間の学校で扱う教育内容の配列等（教育をする側にあるもの）

カリキュラム = 「子どもの学習経験」「子どもの学びの履歴」（学んだ側にあるもの）

②教育課程経営からカリキュラム・マネジメントへ

・新学習指導要領のキーワード

「社会に開かれた教育課程」「学びの地図」「主体的・対話的で深い学び」

- ・学習指導要領や教科書に立脚しつつも、子どもの実態や保護者・地域の願いに応じて指導を柔軟にアレンジすること、多様な学び方を保障しつつ最終的には最適な方法で全員に学力をつけることが期待されている。
- ・学校が組織として授業研究を活性化したり、特色ある学校づくりに取り組んだり、テーマを設定して年間指導計画を見える化していったりすることと直結している。

③カリキュラム・マネジメントで大切なこと

- ・カリキュラムの出発点は教育をする側にある
- ・抽象的でわかりにくいながらも、「子どもの側にあるカリキュラム」を読み取ろうとする努力が必要。
- ・「子どもは今、何を学んでいるのだろうか」と、素朴に疑問を持ちながら子どもの姿を見つめ続けることが大切。

(2)学校全体でのカリキュラム・マネジメント実践

①カリキュラム・マネジメントの起点

- ・学校の中にある様々な組織・チームが、子どもの学習経験をマネジメントすることの必要性を認識し、機能的に活動を展開できなければ、学校全体でのカリキュラム・マネジメントにはつながっていかない。 → これらの多くは組織マネジメントの問題

②カリキュラム・マネジメントを構造的に理解する

- ・学校単位でのカリキュラム・マネジメントを意識するためには、リーダーが個々の教育実践を学校単位に集約し、全体の見取り図を示すことが必要になる。

(i)コンテンツとプロセスの可視化・構造化

(ii)アクターの可視化・構造化

(3)カリキュラム・マネジメントの共有を促進する

①認識の共有・連携行動を阻害するものは何か

- ・共有すべき内容が曖昧 → カリキュラム・マネジメントの視覚化・構造化
- ・個人の問題

- ・組織やチームの文化の問題

② “チーミング” の障壁を克服し学習する組織を作る

- ・リーダー自身がこれらの社会的・心理的障壁から自由になり、リーダーシップ行動を意識しながら障壁の克服や軽減を目指すこと。あらゆる場面で率先して障壁を取り除くリーダー行動を示していくことが、校内に数ある様々なカリキュラム実践のためのチームが「学習する組織」となっていくことにつながる。
- ・リーダーに期待されるリーダーシップ行動

(i) 心理的安全を確保する

居心地の良い仲良し集団、プレッシャーや問題がないこと、結束力や意見の一致があることではない。率直な意見を述べること（対立すること）に対して無意識に「リスクが高い」と感じるような環境を作ることである。

(ii) 失敗から学ぶ

成功のみが評価され失敗が非難される環境では、失敗は表明されないままやり過ごされる。失敗のリスクが高い挑戦も生まれない。小さな失敗、早期の失敗を公表することが、チーム内での責任ある実行や大きな成功への手がかりとなることを明確に示し、失敗に対する適切なインセンティブを用意することが重要である。

(iii) 学習するための骨組みを作る（フレーミング）

「職場で自然に生まれるフレームの多くは本質的に自己防衛するためのもの」である。これを、明確な目的の共有を契機として意図的に学習本位のフレームへと再構成する。

【第5講】カリキュラム改善に必要な条件

(1) カリキュラム・マネジメントを推進する

① 全ての教職員で各学校の特色を創り上げる

- ・カリキュラム・マネジメントは、全ての教職員の参加・参画によって、学校の特色を創り上げていく営み
- ・若手・ミドル・管理職がそれぞれの立場からカリキュラム・マネジメントへ関わる
- ・管理職によるビジョン、グランドデザインの提示

② ビジョンを描き、具体化する

- ・ビジョンを学校の全体構想として表現する ⇒ 学校のグランドデザイン
- ・ビジョンを動かす、具体化する ⇒ 経営戦略であり、方策（戦術）である
⇒ カリキュラム・マネジメントの方向性
- ・経営戦略を具体化する ⇒ 目標を設定し、内部及び外部環境に応じてヒト・モノ・カネ・

情報・時間などの経営資源を配分

⇒ 学校経営計画のとして表現

③教職員を育てる－カリキュラム・マネジメント力を養う－

【A教諭】学校教育目標と授業の間のつながりを、これまで漠然としたものでしかとらえていなかった。

⇒ 目標とする資質・能力の明確化によって、それを達成するための教育課程を自分たちから考え、発信していく必要がある。

【B教諭】カリキュラム・マネジメントと聞くと管理職や教務主任の仕事と思っていた。

⇒ 自分たちが毎日行っている授業が、自校の教育目標や育てたい児童像に一致しているかどうかについて振り返る。その実現のためにカリキュラム・マネジメントをする必要がある。

【C教諭】今までは自分のクラス、自分の仕事のことばかりを考えていて、マネジメントの視点を持つことができていなかった。

⇒ これからは、カリキュラム・マネジメントの視点を持ち、他の先生方にも声掛けをして、すべての教職員で学校をつくり上げることができるよう、役割を果たしていきたい。

④カリキュラム・マネジメントをめぐって－ある校長のメッセージ－

- ・今やっていることを見直してみる。学校教育目標、年間行事計画、教科等の年間指導計画、そして、日々の授業や学級経営が、個々ばらばらにあるのではなく、ちゃんとつながっていること。
- ・職員の頑張りが、それぞれの頑張りでなく、ベクトルを揃えてつながってこそ力を発揮する。そういうデザインになっているか。そうなるように意識して作っているのか。

(2)カリキュラム・マネジメント推進のための“地図”を作る

①どんな力を、いかなる方策で、どの手順で実現をはかるか

- ・わが校の子どもにどんな力をつけるか
- ・教育課程（カリキュラム）の編成
- ・具体策（タクティクス）としての教育組織の多様化・弾力化
- ・手順、手続き、プロセス

②教育課程（カリキュラム）を編成する

- ・グランドデザインを描く
- ・経営戦略を構築する
- ・教育課程（カリキュラム）の構造を明確にする

- ・実施の体制を整える
- ③協働して学校の全体的な“地図”を作成し共有
 - ・校長・教頭のリーダーシップ ービジョンの構築ー
 - ・ミドルリーダーのリーダーシップ
 - ・グランドデザインへの教職員の参加・参画
- ④組織のビジョン、達成すべき使命（ミッション）の明記
- ⑤何をゴールとするか ー最終的な到達点の明記ー
- ⑥到達点に至る戦略を多様な視点で整理
- ⑦到達点に至る成功要因を検討・明記
- ⑧行動（アクション）プランの策定、各々の行動の明記

【第6講】カリキュラム・マネジメントの具体的展開

(1)宇部市立上宇部中学校の取組

- ①生徒の地域貢献活動によって学校を改革
- ②「やまぐち型地域連携教育」の推進（山口県はコミュニティ・スクール導入率100%）
- ③地域学校協働活動
 - ・夢たまご塾 ・紙芝居教室 ・カラーリング教室 ・生花教室 ・各部活動ごとの清掃活動
 - ・地域の方を対象とした英会話教室 ・かみうべ夏祭りボランティア ・泳ぎ方教室
- ④学校全体で行うカリキュラム・マネジメント
 - ・グランドデザインを活用した評価改善サイクル
 - ～生徒を主役にした新しい時代の学校運営協議会のスタイル～
- ⑤教育課程を通じて行うカリキュラム・マネジメント
 - ・SDGsでつなぐ上宇部の子どもの学びと育ち
 - ～高校との学びの連続性を意識した宇部市ならではの「串」の活用～
- ⑥日々の実践の中で行うカリキュラム・マネジメント
 - ・「教師が教える」から「生徒が学ぶ」への転換
 - ～ICTや学び合いを活用した主体的で協働的な学びの実現～

(2)カリキュラム・マネジメントの始め方は様々ある

- ①授業改善（教科等横断）から
- ②学校教育目標から、学校評価から（PDCAから）
- ③校内研修（キャリア教育）から

④ヒトという人的資源の活用から

⑤教育理念の実現に向けて

【第7講】カリキュラム・マネジメントの可能性と課題

(1)平成と令和の二つの中教審答申

①平成の答申と令和の答申

- ・平成の答申（2016（平成28）年12.21）
- ・令和の答申「令和の日本型学校教育」（2021（令和3）年1.26）

②新学習指導要領と令和の答申の関係

- ・令和の答申の実現は、新学習指導要領の実現にかかっている
- ・平成の答申後、改訂後の動き

③「個別最適な学び」についてー主体的に学習を最適にー

- ・学習者の特性や学習進度、学習到達度などに応じ、指導方法・教材や学習時間などの柔軟な提供や設定
- ・自らの学習状況を把握し、学習の進め方について工夫し、調整しながら粘り強く取り組む
- ・興味・関心に応じ、課題の設定、子供自身による情報の収集、整理、分析、まとめ、表現を行うなど、主体的に学習を最適に

④履修主義・修得主義などを適切に組み合わせる

義務教育段階

- ・進級や卒業の要件としては年齢主義に基本を置く。
- ・教育課程を履修したと判断した基準については、履修主義と修得主義を適切に組み合わせる。
- ・それぞれの長所を取り入れた教育課程をめざす。

高等学校段階

- ・修得主義と課程主義の要素が取り入れられていることを踏まえて教育課程を検討する。

⑤教育課程の編成ー履修主義・修得主義・年齢主義・課程主義についてー

- ・履修主義・・・所定の教育課程を一定年限の間に履修することでもって足りる。
- ・年齢主義・・・進学・卒業要件として一定年数の在学を必要とする。
- ・修得主義・・・履修した内容に照らして一定の学習状況が期待される。
- ・課程主義・・・進学・卒業要件として一定の課程の修了を求める。

⑥「個に応じた指導」と「個別最適な学び」

- ・「個に応じた指導」のもとになされてきた教育実践の歩みと蓄積に目を向ける必要がある。
- ・「個に応じた指導」に関わる教育実践について、「個別最適な学び」への蓄積ととらえたい。

- ・「誰一人取り残さない」ところに「個別最適な学び」の眼目がある。そのために、方法上の改善を越えて制度面の改変に踏み込むことの是非についての議論が求められている。
- ・デジタル化への対応として一人一台の端末があり、そこに「個別最適な学び」が。
- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に多様な学びを確保しておきたい。

⑦カリキュラム・マネジメントの充実・強化 ―教育課程への学校の裁量―

- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
- ・履修主義と修得主義
- ・授業時数の弾力的運用

(2)細分化された教育課程の克服 ―常なる課題として―

①平成の中教審答申―「学びの地図」の見直し―

- ⇒ 国際的に評価されている。
- ⇒ 教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理したものとなっている。
- ⇒ 各教科等の縦割りを越えた指導改善の工夫が妨げられているのではないか、指導の目的が「何を知っているか」ととどまりがち。
- ⇒ 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力は、特定の教科等だけではなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多い。

②細分化された教育課程を補正するカリキュラム・マネジメント

教科化ということ

- ⇒ 専門性の深化
- ⇒ 小学校の教育課程（14の教科等）
国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、体育、外国語、特別の教科道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動 それに、プログラミング教育など
- ⇒ 縦割りの弊害を補正する

③教科等横断の求め

- ⇒ 学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が発揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を発揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うこと
- ⇒ 教科等横断を視点とするカリキュラム・マネジメント

④常なる課題として

- ⇒ 新しい学習指導要領等には、各学校が教育課程の検討・改善や、創意工夫にあふれた指導の充実を図ることができるよう、「生きる力」とは何かを資質・能力として具体化し、教

育目標や教育内容として明示したり、教科等間のつながりがわかりやすくなるよう示し方を工夫したりしていくことが求められる。

(3)教科書における教科等横断

●各教科ごとの教科等横断

- ・教科書会社の編集者の頑張り
- ・教科等横断が各教科ごとに取り組まれる
- ・取り組みやすいテーマ、課題、内容の重複
- ・授業時数の大幅な超過

⇒ 学校としての全体的な方針などカリキュラム・マネジメントが必要

(4)「新しい時代の学び」とカリキュラム・マネジメントの推進

①「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還を実現する

- ・「個別最適な学び」が孤立した学びに陥らないようにする。
- ・「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かす。
- ・「協働的な学び」の成果を「個別最適な学び」に還元する。

②ヒトの投入ー少人数によるきめ細かな指導体制の整備ー

③モノ：ICT環境の整備

- ・児童生徒が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を最適化することができるように促していく。
- ・学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等をICTの活用により蓄積・分析・利活用しつつ、児童生徒の興味・関心や悩みなどを見取り、個々の状況を踏まえて指導する。
- ・教師の対面指導と家庭や地域社会と連携した遠隔・オンライン教育とを使いこなす。
- ・ICTを活用しながら協働的な学びを実現し、共に問題の発見や解決に挑む資質・能力を育成する。

④モノ：施設の空間設計ー新しい時代の学びを実現するためにー

- ・学校施設全体を学びの場としてとらえ直す。
- ・学校図書館を核にコンピュータ教室と組み合わせるなど、新たな読書・学習・情報のセンターを生み出す。

⑤全ての教職員で各学校の特色を創り上げる

- ・管理職によるビジョン・グランドデザインの提示
- ・学校事務職員による校長の補佐、教職員との連携と分担

- ・ミドルによるコーディネートとリーダーシップ
 - ・若手の授業と学級経営からの参加・参画
- ⑥カネ：教育課程と学校予算　ー学校事務職員に期待される役割ー
- ・学校組織における唯一の総務・財務等に通ずる専門職
 - ・校務運営への主体的・積極的な参画

(5)学校において教育課程の不断の改善をはかるカリキュラム・マネジメントの実現

①システムを整えるーカリキュラム・マネジメントに向けてー

- ・誰をリーダーとするか
- ・ミドルリーダーによるリーダーシップの発揮
- ・カリキュラム・マネジメントの司令塔
- ・戦略マップ地図の作成
- ・推進をはかるシステムを整える
- ・協働の組織文化の形成につとめる
- ・カリキュラム・マネジメントに関する診断・評価能力を高める

②推進をはかるシステムを整える

- ・教育課程委員会などカリキュラム・マネジメントを担う組織を設け、教務主任などの責任者を置き、そのリーダーシップのもとに推進を図っていくことが大切である。

【第8講】研修全体のリフレクション

- ・研修結果の活用
- ・研修成果活用計画書の見直し
- ・研修計画の作成

8 研修を振り返って

私は教務主任という立場になって2年目だが、それ以前は第5講の中に出てきたB教諭やC教諭のように、カリキュラム・マネジメントなど自分にはあまり関係のないことだと考えていた。さらに、カリキュラム・マネジメントは今回の学習指導要領改訂に伴って注目されるようになった概念であると考えていたが、15年以上前から提唱されていたことを知り、自分の勉強不足を思い知った。今回の研修を通して、カリキュラム・マネジメントは「社会に開かれた教育課程」という新学習指導要領における理念の実現を図るための手立ての一つであり、学校教育目標を達成するため、全ての教職員の参加・参画によって組織的に取り組んでいくべきものであることを再確認できた。

評価を核としてカリキュラム・マネジメントを行うべきであるという点が印象に残った。計画段階で評価まで設計することにより、目的や目標を見失わず、適切な評価ができる。PDCAサイクルはよく聞くが、CAPD、RV-PDCA、SPD、CAP-Dなどの考え方もある。さらにOODAループやAARサイクルなど、多様なマネジメントサイクルがあることも知ることができた。これらを本校に取り入れることができるかを検討したい。

教科横断的な視点を取り入れるため、単元配列表の作成は有効であるが、ただ単にそれを作成することがカリキュラム・マネジメントであるという誤解を生む危険性があり、実践を形骸化させないよう取り組む必要がある。実際に本校で行われている様々な取組にも既に形骸化しているものがないとは言いきれない。何事も「何のために」行っているのかを明確にすることが重要であると感じた。また、学校評価とカリキュラム・マネジメントの連動についても至る所で強調されていた。PDCAのスパンを9月から8月を1サイクルにするという発想は今までなかったため非常に参考になった。この点も含めて学校評価の在り方を見直す必要があると感じた。

学校全体で組織的にカリキュラム・マネジメントに取り組まなければならないが、障壁も様々ある。コンテンツやプロセス、アクターを可視化・構造化し、カリキュラムの連続性とマネジメントの重点を全教職員が共通認識できるようにすることが重要である。新しいことを取り入れることに前向きではない教員もいるが、働き方改革との両立を模索しながら「学習する組織」となれるようリーダーシップを発揮したい。また、新しい時代の学びを実現するために学校施設全体を学びの場として捉え直すという視点は今までになかった。事務職員や養護教諭等も含めた教職員全体で学校の特色を創り上げるという点も大変参考になった。

今回の研修を通して最も強く感じたことは、「つながりが大事」ということである。学校での様々な取組は、学校教育目標を達成するために行っていることを忘れてはならない。「今やっていることを見直してみる。学校教育目標、年間行事計画、教科等の年間指導計画、そして、日々の授業や学級経営が、個々ばらばらにあるのではなく、ちゃんとつながっていること。職員の頑張りが、それぞれの頑張りでなく、ベクトルを揃えてつながってこそ力を発揮する。」というメッセージが強く心に響いた。今後はカリキュラム・マネジメントを推進するとともに、他の教職員のカリキュラム・マネジメント力をも養うことができるよう、さらなる研鑽に励みたい。

3 研究・実践記録

- ・ AKITAグローバルネットワーク事業

A K I T A グローバルネットワーク事業

令和3年度 実施報告書

国際科運営委員会

伊勢憲一
高橋裕子

1 研究テーマ

「秋田の元気を掘り起こし、由利から世界へ向けて発信しよう！」

2 対象生徒

1 年生 1 7 4 名

2 年生 1 6 8 名

3 年生国際科 3 6 名

3 課題研究について

(1) 1 年生は、課題研究の第 1 段階として進路希望に沿ったテーマを設定し、それに基づいて探究活動を行い、2 年次からスムーズに活動を開始できるようにした。総合的な探究の時間に図書館を活用することの共通理解が教職員間で得られているため、テーマに関連した図書を多数揃えることができた。また、探究活動の班ごとの探究テーマ一覧表が提示され、必要な図書を提供できた。2 年次の課題研究に向けた文献レポートを提出させる際、本校図書館だけでなく、市立図書館や県立図書館の蔵書検索の URL も紹介し、相互貸借の活用を促した。

(2) 2 年生は、普通科・理数科・国際科の 3 つの学科ごとにクラスが分かれ、それぞれの特色を活かした活動を実践するよう心掛けた。グループを更に細分化し、指導担当教員を配置して、少人数でテーマに沿って手厚く指導ができるゼミ形式で探究活動を行った。10 月末に、普通科ではゼミごとに、理数科、国際科では科内での発表会を行い、生徒と教員の相互評価により 11 月の課題研究発表会の代表を選考した。

- ・普通科（普通科文系 2 クラス＋普通科理系 1 クラス 合計 3 クラス）

研究テーマについては、次の 3 つに関わるものとして、方向性を絞った。

- ① 地域振興：秋田県や由利本荘地域の問題をグローバルな視点で研究する。

- ② 個々の自己啓発：自己分析や自己管理能力の伸長に関して研究する。

- ③ 進路希望実現：将来就きたい職業について理解を深める。

- ・理数科（1 クラス）

数学班、物理班、化学班、生物班に分かれ、身の回りの現象についての疑問を問題提起とし、実験や観察などを行った。また、秋田県立大学との高大連携授業に参加して専門的な知識を深めた。

- ・国際科（1 クラス）

ディベート班、課題研究班に分かれて活動した。課題研究班は、地域活性化、秋田の海外交流の歴史、エネルギー問題、教育問題、環境問題などの視点からテーマを絞り、秋田県庁訪問・取材、由利本荘市役所出前講座、施設訪問・見学、インタビュー、アンケートなどを通して考察を深めた。

4 国際交流活動について

(1) 例年国際科は台湾への修学旅行を実施していたが、今年も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの流行により、中止となった。しかし、国際科「異文化理解」の授業の中で、台湾について調べて研究したことをポスターにまとめて発表するポスターセッションなどの活動を実施することで、台湾の歴史や地理、文化、言語等への理解を深めることができた。また、例年、修学旅行先で交流活動を継続してきている、台湾の高雄市文山高級中学の生徒との文通やオンラインミーティングなどの活動をとおして、交流を深めることができた。外部講師を招いての講演会等は実施できなかったが、出張イングリッシュキャンプの実施や e-debate 交流会への参加などを行い、異文化理解、異文化交流の機会確保に努めた。

- (2) 国際科の「中国語」の授業において、中国出身の本校講師による台湾や中国に関する講話を通して、理解を深めることができた。

5 成果と課題及び成果の普及について

- (1) 校内発表会を開催し、本校生徒に成果を発表した。保護者の参観も実施することができた。交流校とのオンライン研究発表会は新型コロナウイルス感染症の流行により、断念せざるをえなかったが、発表資料を Google Classroom 上に掲載し、閲覧可能にする形で成果を共有した。
- (2) 課題研究の成果は3月末に報告書として刊行する。

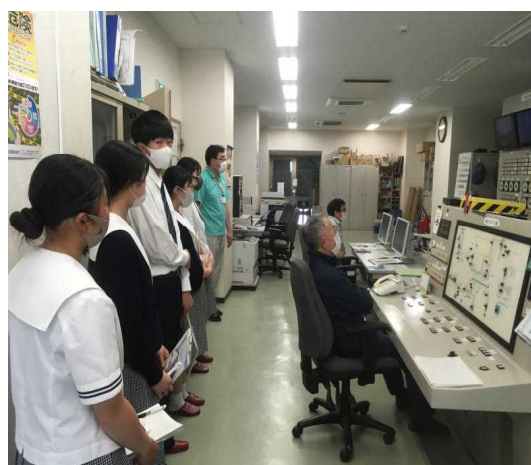
本校では、グローバルネットワーク事業を通して、課題研究をはじめとした様々な活動を行ってきた。以下、それぞれについて今年度の成果と課題を報告する。

〔1〕課題研究に関わる事業：5月～2月

- ① 令和3年6月10日（木）由利本荘市ごみ焼却場訪問・見学



燃えるゴミの攪拌作業風景



ゴミ処理システムの見学

- ② 令和3年6月24日（木）由利本荘市役所出前講座

講師 講座①井島健太氏「ごみを考えること」

講座②佐々木美奈子氏

「ごみの分別とリサイクルの推進による地球温暖化防止に向けた取組」



- ③ 令和3年7月27日（火）秋田県庁畜産振興課見学・取材
- ④ 令和3年9月 9日（木）ナイスアリーナ、西目シーガル見学・取材
- ⑤ 令和3年9月 9日（木）横手市大雄堆肥センター訪問・見学



横手市大雄堆肥センター見学風景



堆肥の保管施設

⑥令和3年6月～11月 コンポストによる堆肥づくり作業、
微生物の存在を確認する実験・観察



生ごみを細かく切ってコンポストへ



毎日まぜる作業を行う



出来上がった堆肥中に微生物がいるか



⑦令和3年10月28日（木） 2年生 普通科課題研究発表会



2年生普通科の課題研究発表会

⑧令和3年11月24日（水）、12月1日（水）
1年生 探究講座研究発表会



仲間と力を合わせて取り組む姿



聞く姿勢もバッチリ

【生徒の感想】

- ・秋田牛について調べるために、秋田県庁畜産課を訪問させていただきました。私たちにも理解しやすいように、資料をたくさん用意して詳しく説明していただきました。積極的に質問することができず、仲間に任せてしまう面がありました。このような場でもしっかりと質問して、十分な情報を得られるように積極的に取り組む姿勢をつけないといけないなと感じました。
- ・ごみ焼却場や堆肥センターなどを訪問し、直接、職員の方々にお話を聞くことができました。地域やその施設が抱えている問題点や職員の皆さんの困っていることが詳しく理解でき、やはり自分の足で現地に行き、情報を得ることは大事だと感じました。
- ・市役所の職員の方々が私たちの学校まで来てくれて講座を開いてくださり、由利本荘市だけでなく、日本や世界が抱えるゴミ問題の現状をよく知ることができた。コロナワクチン接種の準備作業で忙しい中、学校まで来てくれてありがとうございました。

〔２〕各種弁論大会への参加

①令和３年７月１１日（日）第２６回ディベート甲子園東北予選大会

２年生国際科６名が参加した。オンライン開催のため学校で参加する形となった。論題は「日本は積極的安楽死を認めるべきである。是か非か。」で、対戦校は東北学院高校（宮城県）、八戸ウルスラ高校（青森県）、会津高校（福島県）の３校であった。結果は以下のとおりであった。

結果	一戦目	対 東北学院高校	（由利高校は肯定側、敗北）
	二戦目	対 八戸ウルスラ高校	（由利高校は否定側、勝利）
	三戦目	対 会津高校	（由利高校は肯定側、敗北）

②令和３年９月２４日（金）第７３回秋田県高等学校英語弁論・暗唱大会

２年生国際科３名の生徒が参加した（弁論１名、暗唱２名）。オンラインでの開催となり、校内の国際交流室と図書室で参加した。まとまった量の英語を覚えるのが初めての生徒もいたが、練習を重ねて堂々と発表することができた。暗唱の部門では古典落語の作品に挑戦したところ、審査員を務めた ALT の先生方が興味深く聞いてくださったようであった。また、他校の生徒の発表を聞いて大きな刺激を受け、英語学習へのモチベーションも上がったようだ。

英語弁論：兼子七星 Let's spread local food production and consumption

英語暗唱：佐藤颯音 Blowfish Soup

土屋萌々子 The Great Dictator



オンラインによる審査風景

【生徒の感想】

- ・中学生の時にも挑戦したが、難易度や分量が比べものにならないほど違って、やはり高校生のスピーチは大変だと感じた。緊張したが、なんとか最後まで達成できた。
- ・自分と同じテーマに挑戦した参加者がいて、その上手さに圧倒させられた。自分はまだまだだと痛感させられた。夏休み中も何度も原稿をノートに書いて暗記したので暗記はできたが、発音が練習不足だとわかった。
- ・古典落語を英語で演じることに挑戦したが、本物の落語家さんのような演じ方ができなかったことが残念である。頭ではわかっている、なかなか実践できないものだ。何事も練習あるのみだ。でも落語は面白いことがよくわかった。

〔3〕 e-debate交流会への参加

令和3年11月1日（月）、5日（金）

参加者：1年生男子3名、対戦校 大館鳳鳴高校
2年生女子4名 対戦校 大館桂桜高校



2年生の論題は「コンビニエンスストアの24時間営業の是非について」

【生徒の感想】

- ・授業でディベートの練習はしたが、相手はもっとたくさん経験していたようで、全然歯が立たなかった。もっと練習や訓練を積まないとだめだと思った。
- ・思っていることをすぐに言葉に出して自分の考えを伝えることがこんなにも難しいということがわかった。もっと上手に話せるようになりたいと強く思った。

〔4〕出張イングリッシュキャンプ

令和3年11月8日（月）対象：2・3年国際科

講師 Johann Botha氏（仁賀保高校ALT）
Shira Hillinger氏（秋田中央高校ALT）
Mark Allan氏（大曲工業高校ALT）
Robert Arrogante氏（秋田工業高校ALT）



ディベート体験のテーマは「都会暮らしは田舎暮らしよりも良いか、否か」



学習活動

1 校時：

チーム対抗 ALT に関するクイズ大会

2 校時：

班別ディベート体験

テーマ Living in a big city is better than living in the countryside.

3 校時：

チーム対抗ドローイングクイズ大会

【生徒の感想】

- ・ 宿泊をとまなうイングリッシュキャンプに参加したかったが、中止になったので残念に思っていたところ、由利高校にたくさんの ALT が来てくれて嬉しかった。7月までいた ALT のレクシー先生のと、ALT が不在でティームティーチングの授業もなかったのも、久しぶりに英語で授業ができて有意義だった。
- ・ 南アフリカやフィリピンなど、様々な国出身の先生方と交流して、いろいろな文化や習慣がよくわかった。絵を英語で説明するゲームはすごく面白かった。
- ・ ディベートでは、ALT の先生が審査員をしてくれた。相手の意見にすぐ反論することがこんなにも難しいということを感じさせられた。
- ・ わざわざ自分で出かけていくイングリッシュキャンプに行けるほど、英語が上手でない自分にとっては、このような機会は助かると思った。クイズ大会のクイズをとおして一人一人の ALT の国のことや食べ物などがわかって勉強になった。

【5】課題研究発表会

令和3年11月17日（水） 由利本荘市文化交流館「カダーレ」 対象：1・2年生

1・2年生が聴衆として参加した。実行委員会や放送部が中心となり、企画から当日の運営の仕事まで多くの生徒が主体的に関わった。

新型コロナウイルス感染防止のため、入口での検温や消毒、発表会後の座席の消毒といった、例年にはない作業が多々あったが、責任をもって仕事を遂行する姿が見られたことが非常に印象的だった。発表者は当日まで何度も練習を行い、より高い完成度を目指して懸命に取り組み、本番では自信をもって堂々と発表することができた。聴衆の1・2年生もそういった姿に刺激を受けた様子であった。

講師として参加してくださった秋田県立大学教授の先生方からは、次のような講評をいただいた。「毎回、参加させていただいているが、年々レベルアップしている。特に今年度の課題研究発表では施設などの現地を訪問・取材し、自分たちの足で情報を集めるフィールドワークの活動を充実させている班が多く、非常に良かった。インターネットの受け売りに終わらず、丁寧な調査、取材を行っている点が素晴らしい。また、自分たちの研究結果を受けて、問題解決のための具体的な提言をしている班もあり、単なる結果報告にとどまらずに解決に向けて実際に動こうとしている点も評価したい。今後もこの姿勢を忘れずに研究をすすめてほしい。」

〈発表内容〉

普通科 「心が病む原因と対処法」

「今と昔の医療進歩～日本と外国の進歩の差とは～」

「見える先に見えるもの」「日本人が間違いやすい日本語について」

「こどもの発達障害について」
「秋田県の空き家問題の現状」

理数科 「聴覚支援のための『音程→触覚変換装置』」（物理班）
「微生物燃料電池～納豆菌と乳酸菌による発電～」（生物班）
「視覚と聴覚による記憶の違い」（生物班）
「様々な物質の消臭効果」（化学班）

国際科 「日本は積極的安楽死を法的に認めるべきである。是か非か。」
（ディベート班）

「秋田県を3×3バスケの国にしよう」（課題研究班）

「Good-bye!生ゴミ!地球を救い隊!

～生ゴミを減らし、無くすためにできること～」（課題研究班）

Blowfish Soup (英語暗唱)

The Great Dictator (英語暗唱)

Let's spread local food production and consumption (英語スピーチ)



入り口での検温・消毒



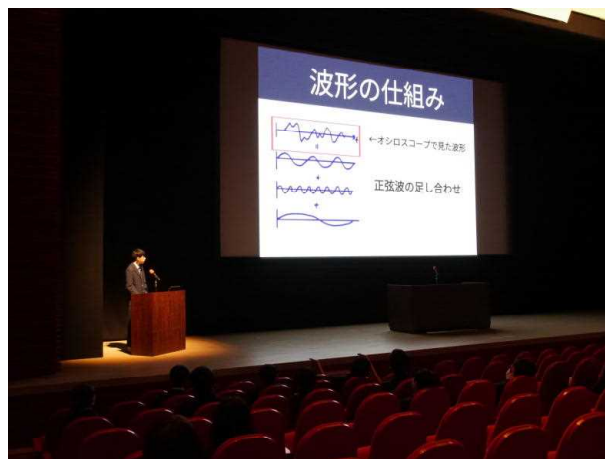
本番前の楽屋で必死に練習



英語スピーチと暗唱



国際科の発表



理数科の発表（化学班）



質疑応答ではたくさんの質問が



大きな舞台で堂々と

〈生徒の変容について〉

2年生国際科の生徒を対象に、課題研究に取り組む前と後に以下の内容のアンケート調査を実施した。

- 4 十分あてはまる 3 まあまああてはまる
2 あまりあてはまらない 1 全くあてはまらない

NO	指 標	5 月	2 月
①	【関心】 日本や郷土の課題に目を向け、活性化することに関心がある。	3.2	3.7
②	【思考】 研究課題について、事実や根拠等を基に、筋道を立てて考察している。	3.4	3.8
③	【交流】 地域社会や、海外・県内高校生等と意見交換し、自身の考えを深めている。	3.6	3.9
④	【発信】 研究課題を、多くの人に興味をもってもらえるよう工夫しながら発信している。	3.2	4.1
⑤	【手法】 課題解決に向けて、複数の調査方法や視点をもって取り組んでいる。	3.2	3.9
⑥	【振興】 秋田を元気にできる、地域振興に繋がる視点を持って研究している。	3.6	4.2
⑦	【啓発】 自己啓発・自己実現によって秋田の元気を掘り起こすことができている。	3.2	3.6

※ 4段階の平均値

課題研究を始める前と比べて、どの項目においても意識の変化がみられた。パワーポイント等のプレゼンテーション資料の作成活動や発表をとおして、聴いている人たちに伝わりやすい資料づくりや話し方の重要性に気が付いた生徒が多いようであった。また、始める前は何気なく日々を過ごしていたものが、課題研究に取り組んだことで、こんなに身近に大きな課題があったことに気付いたという声もあり、視点の変容もうかがえる。自分たちの研究活動が地域活性化や環境問題の解決に微力ながらも貢献できることを知り、小さな一歩を踏み出すことが大きく世界を変えることができる可能性があることに気が付いた生徒が少なくなかったようである。

〔6〕台湾高雄市文山高級中学との交流・授業内でのオンライン交流会

〈実施日〉 10月18日(月) 対象: 2年国際科生徒全員 「異文化理解」の授業
11月15日(月) 対象: 2年国際科生徒全員 「異文化理解」の授業
11月29日(月) 対象: 2年国際科生徒全員 「異文化理解」の授業
12月20日(月) 対象: 2年国際科生徒全員 「異文化理解」の授業

〈内容〉 * 各回20分程度

・代表挨拶 ・学校紹介 ・動画鑑賞 ・芸能発表

〈交流を終えて〉

昨年度は一度のみの開催であった本校の交流校である文山高級中学とのオンライン交流会を今年度は複数回実施した。生徒職員共に慣れない中での交流であったが、回を重ねるにつれて準備や回線への接続、相手校とのやり取りも徐々にスムーズとなった。お互いの授業時間や時差の関係で十分な交流時間が確保できず、毎回20分程度の短い交流時間ではあったが、代表生徒の挨拶に始まり、学校紹介や様々な内容を盛り込むことができた。残念ながら表面的な交流に留まり、お互いの国や世界が抱える諸問題についての意見交換など理想とするレベルには届かなかったが、交流の機会を多く作り少しずつでも実績を積み重ねていくことが重要であると考えている。文山高級中学の窓口となる担当者も昨年から変わっており、先方と内容についてのやりとりや日程調整など、事前の準備にもそれなりの労力が求められるが、ベースになるのは相手との人間関係であると感じている。ノウハウも乏しい中で新たな取り組みを企画し継続していくには、本校も同様であるが担当教員の意欲に左右される部分が大きいと感じている。なお、先方からの申し出により手書きの手紙による文通を行っており、デジタルが主流になりつつある時代においてアナログ的なコミュニケーションが生徒にとって新鮮であったようである。こちらの想像以上に生徒が喜んでおり、心のこもった手書きの手紙のやりとりの持つ意味の大きさに気付いたようであった。

〔7〕Asian Students Exchange Program 2021への参加

令和3年12月28日(火) 対象: 2年国際科生徒5名

〈概要〉

本校の交流校である台湾高雄市文山高級中学から誘いを受け、高雄市教育局主催のオンラインによる課題研究発表会(12/27, 28)に参加した。高雄市の高校とアジア諸国の高校が協働研究を行い、英語によるプレゼンテーションを行った。本校は文山高級中学のグループと共に、大会の共通テーマである「感染症収束後の時代における、持続可能な開発目標に向けた取り組み」について、それぞれの観点から貧困対策についての対策を発表した。

〈発表主題〉

A small change will make a big difference ~From “Vertical” to “Horizontal”~

〈要旨〉

Japan used to be one of the most developed and richest countries in the world, but poverty is one of the serious problems for us to solve today. From a short-term perspective, we need to donate food or money to help those in need. From a middle-term perspective, we need to change rules or systems of our society. But we propose a solution in a psychological approach from a long-term perspective. It is an approach to change the values of the Japanese, especially of future readers. We find a problem and solution in ranking tables for students to choose their colleges, since

those ranking tables might have influenced high school students' mentality.

We Japanese tend to compare ourselves with others, whether we are inferior to others or not. We often worry about our ranks or levels where they belong. High school students in Japan may have developed their sense of superiority or inferiority complex because of those tables. We propose to change the style of the ranking table, from vertical to horizontal, at high schools in Japan. With the horizontal ranking table, students would be less worried about their rank, whether the others are superior to them or not. We want to stop high school students from classifying themselves, superior or inferior to others, and want future readers to be “real” leaders. From “vertical” to “horizontal”, this is our solution to solve the problems such as poverty in Japan from a long-term point of view in post-pandemic era.



本番まで何度も練習を重ねました

〈発表を終えて〉

本来であれば2年国際科は修学旅行で高雄市を訪問し文山高級中学の生徒と様々な交流活動を行う計画であったが、2年連続で中止となっている。多様な文化的背景を持つ人々との交流が本校国際科の中核であり、コロナ禍によって多くの特色ある行事が許されない状況は、ダメージとして非常に大きいものがある。例年行っている小学校への訪問や外部講師による特別講義も軒並み中止となっている中、文山高級中学と昨年度から実施しているオンライン交流を発展させることは重要なテーマであった。

今回参加した Asian Student Exchange Program は20年程前に台湾高雄市で始められた研究発表大会であり、コロナ禍以前は大会場を利用して大規模に開催していたようである。先

に述べたオンライン交流会は授業を利用した短時間の気軽な文化交流であったが、今回は国内外の多くの学校によって視聴され、発表校のレベルや質が問われる場であり、参加する上での責任や重圧も大きかったが、文山高級中学の担当者から誘いを受けた際は、国際科の生徒へ刺激を与えるものとして無二の機会であると考え参加を承諾した。11月までは学校の課題研究発表もあるため、2年生国際科から参加希望者を募ったものの中々集まらず、発表の準備においても教師主導にならざる得なかった点是否めない。しかし、発表に向けた文山高の生徒や教師との交流を通じ、生徒の姿勢や意識も変わっていった。本番では、接続テストを数回行い入念に動作確認の作業を行っていたものの、画面の切り替えがうまくいかず、改めてオンラインの難しさを痛感した。こちらの発表の一部を伝えることができなかったのは残念であったが、生徒は最後まで堂々と自分たちの役割を果たしてくれた。発表後の質疑応答では、画面に次々に現れる質問の数と内容に圧倒されもしたが、こちらが選択した質問の1つに対して応答することができた。海外の研究発表大会への参加は初めての試みであり、指導する側として不安も大きかったが、コロナ禍でオンラインが普及しつつある状況だからこそ得られた貴重な経験であった。本校の国際科は2年次からのスタートであるが、事前の活動として1年次に数回学科別の活動を行っている。1年生の活動日に、2年生から今回の発表を実際に見せてもらったところ、英語の読みや発表の内容に大きく刺激を受けた様子であり、学科としての縦のつながり強化の一助となった。

今後の課題としては、今回の経験を一過性のものにせず、いかに継続的な国際科の行事として位置付けていくかであるが、生徒及び教師共にそれなりの負担が求められる。学校業務のスリム化が進む中で真に必要な業務の選択、国際科の活動に対する生徒及び教師の共通理解も必要であると考えます。

〈国際科の活動を通して 生徒の感想〉

- ・中国語や異文化理解など、国際科独自の授業があるため、国際科を選んだが、やはりこれで良かったと感じている。台湾の学生たちと交流できたり、出張イングリッシュキャンプなどのイベントを通して、それまでの自分にはなかった視点とか物の見方が身に付いたように思う。そういう考え方もあるのか、とか、そういう生活をしている人もいるのか、などの気付きがいろいろあって、前よりも違いを受け入れることができるようになったと思う。他者との違いを認める姿勢というか、多様性を受け入れる姿勢というか、そういうものが身に付いた自分を感じる。

- ・国際科では、国際関係入門の授業と総合的な探究の時間を使って課題研究を行った。普通科は総合的な探究の時間だけなので、普通科よりも時間をかけて取り組んだことになる。最初は2時間連続で疲れるな、と感じたこともあったけど、調べる活動とか、施設を訪問したりする時に、まとまった時間があつたほうがやりやすいので、これで良かったんだと思うようになった。自分たちは恵まれているんだな、と思った。また、普通科は一人で研究をすすめていたが、国際科と理数科では班別に研究することができたので、その点でも恵まれていたと思う。仲間と助け合うことができるのは本当に良かった。自分だけだと気が付かないことも、仲間が教えてくれたりして助かった。

- ・生ごみの課題研究をした班がすごかった。いろいろな所に現地取材に行ったり、電話で取材したり、講演を聞いたり、自分たちで実験をしたりして、充実した研究だと思った。おかげで、発表のすべてに説得力があつた。インターネットや本だけで調べるのも、もちろん悪いことではないし、これだけ情報化社会になっているので時代に即しているとは思いますが、やはり人が実際に見聞きした事実の説得力には勝てないと改めて思い知らされた。そういう研究をできたという点でも、国際科の存在感は大きいと感じた。

- ・課題研究でディベート班を選んだことで、ディベート大会に参加したり、研究発表としてまとめて報告する経験ができた。これを選んでいなければ、ディベートがどのようなものなのかも分からなかっただろうし、安楽死について深く考えることもなかったと思う。知識と経験を大きく得ることができた。

- ・大学進学を希望していたので国際科を選んだ。国際科イコール英語ができる、みたいな

雰囲気があるのかと不安に思っていたが、自分のように英語がそれほど得意でない人でも台湾の人たちと文通で交流できたので、すごく楽しかった。手書きの手紙がとてかわいくて、心がこもっていると感じた。英語でのやりとりになったけど、相手が言いたいことはなんとなく理解できた。英語を使わなければ、という意識は気付いたらなくて、言いたいことを伝えることに夢中になっているうちに、いつのまにか英語を使っているという感じだった。イングリッシュキャンプも良い経験になった。後輩にも国際科をすすめたい。

- ・グローバルネットワーク事業というものがあるおかげで、自分たちの研究に必要なものを準備できたり、施設見学などを行うことができたので、ありがたかった。

- ・国際教養大学の見学に行く予定があったみたいだけど、実現できなかったのは残念だった。大学の中に入って施設を見学したり、授業を受けたり、図書館を利用したりしたかった。在学中の学生さんの話も聞いてみたかった。あと、小学校の英語授業アシスタント体験もできなくて残念だった。

- ・国際科での1年間を振り返ると、外部の事業などに参加する機会が他のクラスに比べて圧倒的に多いなと感じた。自分は、e-debate交流会、アジアスチューデントエクスチェンジプログラム、出張イングリッシュキャンプに参加させてもらった。大忙しの一年だった。でもいろいろなことに挑戦できて、ものすごく充実していた。

〈まとめ〉

今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響を受けて、台湾修学旅行、小学校外国語活動補助ボランティア、大学訪問等の、予定していた様々な行事や企画が実施できなかった。しかし、そのような状況だからこそその工夫が生まれ、この状況なりの有意義な経験ができることもあった。

グローバルネットワーク事業を通して、様々な活動を行ってきたが、本校の大きな特色である国際科では特に意義深い活動を体験することができた。何より意義深かったのは、地域や国外とのつながりを意識し、広い視野で物事を捉える力を培うことができたことである。国外ばかりに目が行きがちで、自分たちの身近な問題は見落としてしまう傾向があるが、課題研究を中心に、グローバルネットワーク事業に支援された活動を通して、まずは自分たちの地元、そして日本に目を向ける機会が得られ、自分たちの根幹をなすものと向き合うことの重要性に気がつくことができたのは非常に有意義であった。

今後の展望として、昨年度から中止や延期を余儀なくされてきた行事や企画が順調に実施できる方向性を模索し、コロナ渦においても実現可能な形を工夫するなどしていきたいと考えている。特に国際教養大学、秋田大学、地元小学校、外部団体との連携を一層強化し、将来のビジョンを見据えた活動をすすめていきたい。

編 集 後 記

多くの先生方の御協力により令和3年度『研究紀要』を刊行することができました。昨年度に続き、コロナ禍による制約は教育活動全般に及び、その収束を見通すことのできないまま年度末を迎えようとしています。一方、タブレットや電子黒板の設置により校内の授業風景が様変わりした1年でもありました。ICTを活用した授業実践など、喫緊の授業改善課題への取り組みが、思いがけず本格化した一年目だったと言えます。

次年度は、新学習指導要領全面実施の初年度となります。今後は、「ICTを使ってみる」授業から「ICTで思考力・判断力・表現力を育む」授業が求められる中で、教員研修はますます重要になると思われます。今後も授業改善等教員の資質向上につながる取組を全職員の共通理解を図りながら進めていきたいと思っています。

年度末のお忙しい中御寄稿下さいました先生方、さまざまな形で編集に御協力下さった皆様に、心より御礼申し上げます。これらの研修を今後も継続し、より一層指導力の向上に努めていきたいと思います。

教務部（研修担当）